

若き日のタカクラ・テル

－作家への道－

山野 晴雄

はじめに

タカクラ・テル⁽¹⁾の名前は、高校日本史の教科書⁽²⁾にも自由大学運動との関連で登場したことがあるとはいえ、若い世代にはほとんど知られていない。

かつて私は、タカクラ・テルについて、人名辞典にその生涯を次のように叙述した。

「大正・昭和期の作家、社会運動家。本名輝豊。明治二十四年（一八九一）四月十四日、父輝房、母美弥の長男として高知県高岡郡口神川村（窪川町）に生まれる。第三高等学校から京都帝国大学文科に進学、大正五年（一九一六）京大卒業後嘱託となる。十年土田杏村とともに長野県で自由大学運動を起し、十一年以降『女人焚殺』『蒼空』などを出版し、小説『高瀬川』『百姓の唄』『狼』を『都新聞』に連載するなど作家としても活躍した。次第に農民運動に参加するようになり、昭和八年（一九三三）二・四事件（教員赤化事件）で検挙された。翌年保釈され、その後は国語・国字問題、農業問題について独自の見解を発表、十五年には小説『大原幽学』、十九年には『ニッポン語』を出版した。第二次世界大戦後は日本共産党から衆議院議員に当選、二十五年には参議院議員となったが、マッカーサーによって追放され、中国に亡命した。二十六年『ハコネ用水』を発表、三十四年帰国、四十八年共産党中央委員会顧問となった。六十一年四月二日、東京都昭島市で没。九十四歳。『タカクラ・テル名作選』（全六巻）⁽³⁾が刊行されている。」

この簡単な経歴からも知れるように、タカクラは、作家としての活動だけでなく、自由大学運動・農民運動の指導者として活動し、戦時下には国語・国字問題、農業問題などで発言し、戦後は政治家としても活躍し、また晩年は民族芸能にも関わるなど、幅広い活動をしてきた。

このタカクラ・テルについては、これまで、大正デモクラシー期⁽⁴⁾の自由大学運動や昭和初期の長野県における農民運動⁽⁵⁾との関わりで、また、戦時下の転向との関連⁽⁶⁾で取り上げられてきた。しかし、タカクラが知識人のひとりとしてどのように生きてきたのか、その全生涯を明らかにする作業はまだなされていない。わずかに小林利通⁽⁷⁾がタカクラの幼年・少年期から大学時代までの思想形成を跡づけたものと、米山光儀⁽⁸⁾がタカクラの半生を素描したものがあにすぎない。

本稿の目的は、タカクラの評伝研究を進める作業の一つとして、その幼年・少年時代から学生時代を経て長野県に移住し作家として出発するまでの半生を跡づけることにある。

(p.112)

註

- (1) タカクラ・テルの表記は、時期によって高倉輝→高倉テル→タカクラ・テルと変わっているが、ここでは、タカクラ・テルで統一する。
- (2) 高校日本史の教科書では『高校日本史B』新訂版（実教出版、1998年文部省検定済）がタカクラの上田自由大学での講義風景の写真とともに、自由大学運動60周年記

念集会でのタカクラの回想を紹介している。また、最近では、『日本史A』（東京書籍、2007年文部科学省検定済）がタカクラの講義風景の写真を掲載している。

- (3) 拙稿「たかくらてる 高倉輝」（国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第15巻上、吉川弘文館、1996年、101頁）。同（臼井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、2001年、592頁）。
- (4) 自由大学運動については多くの論考がある。拙稿「自由大学運動の歴史」（長野大学編『上田自由大学とその周辺』郷土出版社、2006年）などを参照。また、タカクラと自由大学との関係を検討したものに、米山光儀「上田自由大学の理念と現実－タカクラ・テルの教育的営為－」（慶應義塾大学大学院『社会学研究科紀要』第21号、1981年）などがある。
- (5) 安田常雄『日本ファシズムと民衆運動』（れんが書房新社、1979年）、上小農民運動史刊行会『長野県上小地方農民運動史』（同会、1985年）など。
- (6) 魚津郁夫「ある大衆運動家－タカクラ・テル－」（『共同研究転向』上巻、平凡社、1959年）、道場親信「戦時下の国民文学論－タカクラ・テルの文学・言語理論を中心に－」（『レヴィジョン』第二輯、1999年）、拙稿「戦時下知識人の思想と行動－タカクラ・テルの場合－」（『法学新報』第109巻第1・2号、2002年）。
- (7) 小林利通「タカクラ・テルについて－その思想形成－」（『自由大学研究』第3号、1975年）。
- (8) 米山光儀「タカクラ・テルの半生－大衆から学んだ知識人－」（山手英学院『紀要』第12号、1982年）。

1 幼年・少年時代

タカクラ・テルは、1891（明治24）年4月14日、父輝房・母美弥の長男として高知県高岡郡口神川（現在の四万十町）⁽¹⁾に生まれた。本名は輝豊⁽²⁾である。

高倉家は、高知県幡多郡七郷村浮鞭^{うきぶち}（現在の黒潮町）の海岸で六代続いた医者⁽³⁾の家で、応仁の乱を避けて土佐に下り中村を開いた一条家とともにこの地に流れ着いたという伝承をもつ。タカクラは、「ミイラ取りの話」（『国語運動』第1巻第3号、1937年）で、言語学的経験について回想しているが、自分の育った幡多郡が関東風のアクセントをもち、自分の家が近所と言葉が違って、近所では母親のことを「オカー」とか「カーヤン」とか言っているのに、自分の家では「オナンサン」とよんだと述べている。

父の輝房は、1865（慶応元）年生まれで、幡多郡浮津在の旧家である小谷家から養子として高倉家に入った。もともと輝房の父猷吉は高倉家から出て小谷家の養子となっており、
(p.113)

その子柳太郎が小谷家を嗣ぎ、柳太郎の弟、すなわち輝房が高倉家を嗣いだのである。輝房は、高知の医学校に入ったが、高倉家に財産がなく中退しなければならなかったため、限地開業の資格だけを持っていた。

母の美弥の実家である吉田家は、郷土の家で、兄の通武は浮鞭で医者を開業し、弟の通信も中村町で医者を開業したが、その後宇和島市の尾崎家の養子となり、眼科医を開業し

ていた。美弥は、1867（明治元）年生まれで、19歳のとき、中村町の親戚の家へ裁縫の稽古に預けられたが、その家が神風連の乱で殺された熊本県令安岡亮介の家であった。その家で、当時16歳の幸徳秋水が勉強していたが、安岡の妹が秋水の母で、美弥は、この秋水の母多治子に裁縫を習ったという⁽⁴⁾。

父の輝房は、医学生のところから自由民権運動に参加していた。とくに自由党の大江卓に深く傾倒し、床の間には「上に板垣退助、下に河野広中・松田正久・星亨の三人がならんでいる」掛軸があり、タカクラを抱いて子守歌に歌っていたのが大阪事件の大井憲太郎を歌ったものであったという⁽⁵⁾。また、家は貧しく古い本箱が二つあったきりであるが、その中に中江兆民の『一年有半』もあったという⁽⁶⁾。輝房は、美弥の兄通武と親友であり、医学生のところから自由民権運動に参加していた。そうした関係から輝房と美弥は結婚することになった⁽⁷⁾。

父の輝房は、医学校を中退したため、正式な開業は出来なかったが、当時の規則で特定の地域での診療を許された。しかし、限地開業はうまく行かず、各地を転居しなければならなかった。出生地である高岡郡口神川から秋丸に移り、3歳まで暮らしたあと、幡多郡七郷村浮鞭に定住した⁽⁸⁾。一時、輝房は福岡県の巡査になって、一家は福岡県に移り住んだこともあったが、それも長く続かず、タカクラが尋常小学校1年のときにまた、故郷の浮鞭に帰ってきて、輝房は村役場に勤めた⁽⁹⁾。

タカクラの故郷である浮鞭は、高知県の西端「足摺岬の根のあたりの海岸の、長い松原のつづく、景色のよい所」で、村は、わずかの地主と医者と商人のほかは、貧農と貧しい漁民ばかりであった。「海岸の砂浜では、農家の婦人たちが、半裸体で、海水をくんできて、まいて、かわかして、それをたいて、さかんに塩を作っていた」。タカクラは、「その塩でそだった⁽¹⁰⁾」という。

タカクラは、発育もよく、丈夫で大きかったという。「一年目の誕生日に、誕生祝いの重箱お背に結びつけ、母方の祖母にもらった鈴のついた小さなげたおはいて、自分で、もちくばりおした⁽¹¹⁾」といわれ、親戚の話の種になったという。大きな身体だったので、近所の人から「ぼうさんは、大きくなったら、すもうとりになりますか」と聞かれたりしたという⁽¹²⁾。

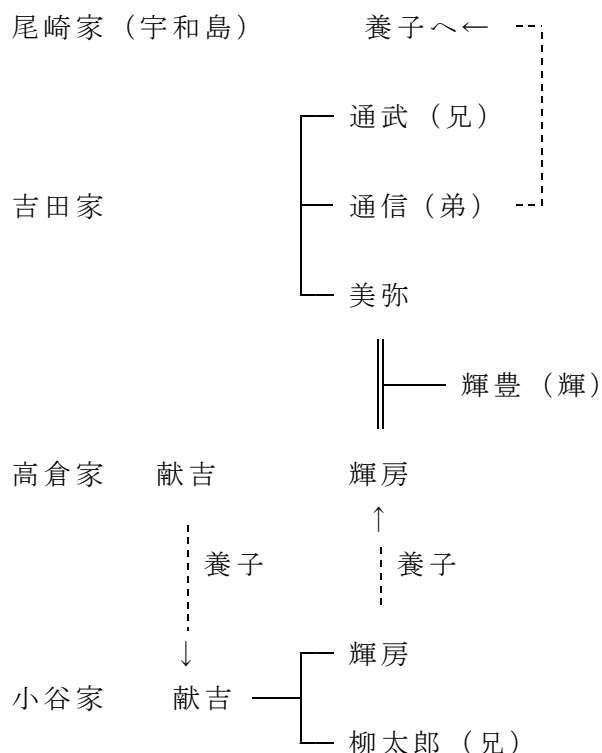
タカクラは、1897（明治30）年4月、南郷尋常小学校（当時の修業年限は4年）に入学した⁽¹³⁾。当時はまだ、校舎も出来ていなくて、「部落の天神さまの社のなかで、授業を受けた⁽¹⁴⁾」。小学校の同級生である大西吉馬はタカクラを「おとなしい男だった」と回想しているが、級長をしたことがあるという⁽¹⁵⁾。当時は、学齢を過ぎてから入学する方が普通であつ

(p.114)

たが、タカクラは父親が誕生日をごまかして一年早く入学させたため、同級生は大抵、二、三歳年上で、背もいちばん小さかった。それでも、成績はよかったものの、よく同級生にいじめられて、泣かされていたという⁽¹⁷⁾。

その後、タカクラは、1901（明治34）年4月、入野高等小学校（当時の修業年限は4年）に入学し、2年間、高等小学校で過ごした⁽¹⁸⁾。

高倉家系図



註

- (1) 戸籍では、「高知県幡多郡七郷村大字浮鞭参拾参番屋敷に於て出生」とあるが、高倉太郎氏によれば、口神川で出生したという（高倉太郎氏作成「タカクラ・テル年譜」）。
- (2) 1927年12月20日に「輝豊」を「輝」と改名が許可されている（戸籍による）。
- (3) 高倉テル「ミイラ取りの話」（『国語運動』第1巻第3号、1937年42～43頁）。
- (4) タカクラ・ツウ「自伝草稿」1955年、105頁。タカクラは、幼少期に、母美弥より寝物語に「安岡熊本県令惨殺の物語」を聞かされ、物語の終わりに「此の安岡県令の妹こそは秋水の母なる人なり」と聞かされていたという。タカクラは、「母の家は此の安岡家と相識る事最も深く、母が幼少時秋水と面識を得るに至り申し候も此の安岡家に於ての事に御座候。小生の母は余程この秋水の母なる婦人に私淑致し居り候ひしものと相見え候」と書いている（高倉輝「幸徳秋水の墓に詣づるの記」）。また、タカクラは、美弥から、秋水のことを「デンさん、デンさん」と言っていたこと、秋水が「かにみそ」が好きだったなどという話をよく聞いたという（タカクラ・テル『愛と死について』葦会、1951年、124頁）。
- (5) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」（『前衛』第304号、1970年2月）、162～163頁。
- (6) タカクラ・テル「中江兆民・幸徳秋水など」（『日本近代文学大系月報42』第50巻付

録、角川書店、1973年)。

- (7) タカクラ・テル『愛と死について』前掲、125頁。
- (8) 小林利通「タカクラ・テルについて—その思想形成—」(『自由大学研究』第4号、1975年)3頁。
- (9) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、112頁。
- (10) タカクラ・テル「故郷を思う」(『高知民報』第650号、1982年1月1日)。
- (11) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、109～110頁。タカクラも土田杏村宛の手紙で、「最も僕が一年の誕生日に下駄ばきで祝のもちを町内へ持って行ったと今でも親戚の噂に残ってる」と書いている(1923年10月23日付、土田杏村宛高倉輝書簡)。
- (12) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、111頁。タカクラは、「わたしはからだが大きく、ある人が「すもうとりになれ」といったら、「代議士になるつもりだ」といったというので、笑い話になったが、それも父が代議士がいちばんえらい者のように教えこんだ結果だったろう」と回想している(タカクラ・テル「人生問題から社会問題へのナヤミへ」前掲、163頁)。
- (13) 高倉太郎氏作成「タカクラ・テル年譜」。

なお、植田馨は、鞭在住の山崎茂雄から聞いた話として、タカクラは、山崎が5年生か6年生の頃、すなわち1923年前後の頃、母校の南郷小学校のために校歌を作って送ってきたことがあり、山崎が覚えていた歌詞を教えてもらって手帳に書きつけたことを回想している。当時の校歌は難しい漢語を多用した文語調のものが大半の中で、タカクラのは文語調のものとは全く違う「平易な口語七五調」の次のような歌だった。

「今日も みなさん きげんよく／ともども はげみ まなびましょ／上には たかい大空を／ただ かぎりなく ながめます／たがいの むねも あのように／ひろきが上に かつ きよく／そうして ともども はげみましょ／みんなで なかよく あそびましょ」。

植田は、「子ども達は喜んですぐ覚えて歌ったらしい。が、どういうわけか、この歌は校歌として正式には採用にならなかった」と、タカクラの作った校歌のエピソードを紹介している(植田馨「タカクラさんのこと」『大形』第129号、大方町公民館文学学級、3頁)。

- (14) タカクラ・テル「故郷を思う」前掲。
- (15) 高知新聞社編「タカクラ・テル」(『土佐人物山脈』高知新聞社、1963年)229頁。
- (16) タカクラ・テルより聴取、1981年11月21日。
- (17) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、112～113頁。
- (18) 高倉太郎氏作成「タカクラ・テル年譜」。

(p.116)

2 中学時代

タカクラは、1903(明治36)年、高等小学校2年を修了すると、愛媛県の宇和島中学校を受験して合格した。

タカクラが12歳になるころ、両親はひとり息子をどこの中学校に入れようかと考えた。

中村にある中学校に入れることも考えたが、「いなかの学校だから、出世^{ママ}できない」と考えていたところ、美弥の弟で、宇和島で眼科医を開業していた尾崎通信から「宇和島の中学^{ママ}え入れて、自分の家^{ママ}からかよわしたらどうか」と言ってきたので、宇和島中学校を受験することになったのである⁽¹⁾。タカクラは、このときのことを、「家じゅうが、なにより、びんぼうをなげき、恥じ、学問をして、出世をして、家をおこすことがひとり子のわたしの義務だと、両親も、わたしも、親戚も、みな信じていた」と回想している⁽²⁾。

貧しい生活の中から脱出する方向は出世であった。父が自由民権の息吹を体験していたとしても、タカクラの少年期には「自由民権の思想は出世主義に転化してしまっていた⁽³⁾」のである。

こうしてタカクラは、叔父の尾崎通信の書生となって、宇和島中学校に通学した。学費だけは家から仕送りがあったが、食費は叔父にもってもらい、そのかわりに、病院のランプの掃除その他の雑用をした。試験の最中でも雑用を言いつけられ、それがつらかったという⁽⁴⁾。

両親と別れて生活した中学時代について、タカクラは、こう回想している。

「ひとり子のわたしがふた親のそば^{ママ}おはなれることが、どんなにつらく、また、わたし^{ママ}お手ばなす、ふた親が、どんなにつらい思い^{ママ}おしたことか？ とくに、母^{ママ}わたしにこいこがれ、わたしも母にこいこがれた。いよいよ、夏休みがおわり、母と別かれて、また、ウワジ^{ママ}まえかえらなければならない時にわ、わたしも身^{ママ}お切られるよーにつらかったが、母のほ一わ、もっとひどかった。そのあと二・三日^{ママ}わ、まったく仕事が手につかず、げっそり、やせたということだ⁽⁵⁾」。

タカクラが帰省するときには、「山をこして四万十川の江川崎にでて、そこでひと晩とまって、翌日、材木を運ぶ川舟の便で、中村まで下り、それから、十五キロ歩いて、やっと家へ帰った⁽⁶⁾」。そして、タカクラは、宇和島での生活がつらかったため、夏休みに帰省するたびに、宇和島に帰るのをいやがったが、母親が「一人、心で泣いて、しかりつけ」、波止場の船まで付いて行って、「たがいに姿が見えなくなるまで、見送っていた⁽⁷⁾」という。

タカクラは、中学時代、土佐のことばと違っていたため、「ヂ・ヅをジ・ズに直すのにひどく骨を折⁽⁸⁾」ったという。書生生活を続ける中で、愛媛県の城下町の繁栄と、育ってきた南土佐の漁村の貧困との対比は、多感な少年の胸に灼きついたと思われ、子どものころからの「本のムシ」といわれる孤独な探求と思索が続けられた。中学に入学した年の1903年の5月22日に、一高の藤村操が華厳の滝に身を投げ厭世自殺をした事件は、多くの青
(p.117)

年に衝撃を与え、後追い自殺をする青年たちも出たが、タカクラにもショックを与え、「生きていることの意義はなにか、人生の目的なにか」と考えさせ、哲学に大きく心をひかれていくきっかけとなった⁽¹⁰⁾。また、叔父の家で取っていた『文芸倶楽部』から、神風連の乱を知ったり、内田魯庵の短編を読んで「虚無党」という言葉に初めて出会ったり、夏休みの帰省中に本箱にあったはずの『一年有半』を探したりしている⁽¹¹⁾。

中学3年の冬休みに帰省したタカクラは、浮鞭の少女たちの悲惨さを見ている。タカクラの小学校の同級生で副級長であった貧農の娘が、大阪の紡績工場で肺病になり、村に帰ってきていた。その娘のことを、こう書いている。

「肺病ときまると、部落から十町ちかくはなれた、海べの砂浜に、やっと、ひとりはい

れるだけの、こやお立てて、そこえ入れる。もとより、なおるとわ、だれも考えない。死ぬのお待っただけだ。

その子もこやえはいつていた。わたしわ、その子と仲がよかったので、たずねてやろーと思つたが、母が、うつるとたいへんだといつて、どーしても行かせなかつた。そのくせ、母わ、うちから、ろくに食いものもとどけないで、かわいそーだといつて、ときどき、何か持つていつていた。

年のくれに近い、ある夜のこゝと、母がたずねると、海があれて、波わ、こやの入口まで、よせていた。その子わ、あかりも何もない、まっくらななかに、ねていたが、も一、頭おあげる力もなくなつていた。それでいて、奇妙なこゝとあつた。頭のすぐ近くであれくるう波の音のあいだに、馬のいななく声が聞こえるといつたそーだ。

その子わ、正月の二日に、死んだ。日がくれてから、海べで、大きな火のもえるのが見えた。その子のからだとこやおやく火だつた。

こーして、毎年、何人かの娘が海べでやかれた。」⁽¹²⁾

夜の砂浜で小屋ごと焼かれる火柱を見たタカクラは、女工のひとりから徳富蘆花の『不如帰』を借りて読み、「肺病で死ぬ、ふしあわせなナミコにたいして、女工たちが限りない同情おそそぐ理由」を理解することができた。⁽¹³⁾

1908(明治41)年、宇和島中学校を卒業し、5年間の中学生生活を終えた。

タカクラは、「大学で哲学を勉強したい」という強い希望をいだいていた。中学時代に愛読して徳富蘆花の『思い出の記』の影響を深く受け、何十回と読み返す中で、「人力車夫になって苦学する決心」をかためていた。⁽¹⁴⁾しかし、両親や親戚は、代々医者の家であることから、医者になることを望み、ことに叔父の尾崎通信は「学費を出してやるから、岡山医専を受けろ」とすすめてきたりして、大反対であつた。結局、この年はどこも受験しないで、家で過ごすことになつた。⁽¹⁵⁾

タカクラは、1年間、母親の養蚕の仕事を手伝つたり、読書をしたりして過ごした。徳富蘆花、高浜虚子、尾崎紅葉などの作品や、家にあつた実録もの、博文館から出ていた「帝国文庫」、聖書、禅宗の本などを読みふけたといふ。⁽¹⁶⁾

18歳になり、再び受験の時期となつた。両親も親戚も相変わらず医科の受験をすすめ
(p.118)

た。こんどはタカクラも、表向きは周囲の意見を受け入れ、岡山医学専門学校(岡山医専)を受験することにした。

1909(明治42)年7月、岡山医専を受験するため、故郷を出発した。当時は、鉄道がなかつたため、村から一里余り東にある上川口という港から小さな汽船に乗って高知まで行き、そこで一晩泊まり、大きな汽船に乗り換えて大阪に着く。そして港から人力車で梅田の停車場に向かい、そこから汽車で岡山へ行くという行程であつた。ところがタカクラは、高知に着くと、両親に宛てて「どうしても哲学を勉強する気だから、京都へ行って三高の文科の試験を受け、入学できたら、苦学して勉強するつもりだ」という趣旨の手紙を送つたのである。⁽¹⁷⁾『大原幽学』(タカクラ・テル名作選Ⅲ、理論社、1953年)の巻末年表には、「周囲の者がすすめる岡山医専を受験すると見せかけて、同級生五人と、京都の三高お受けに行く。合格。」とあるが、タカクラが第三高等学校(三高)の一部乙類、すなわち文科を選んだのは大学で哲学を勉強するためであつた。医者となつて高倉の家を土佐に再興

するという周囲の設定した行路では、タカクラの青春は満足できなかつたのである。⁽¹⁸⁾

タカクラは、京都に着いたときのこと、こう回想している。

「海があれ、さんざん船よいに苦しめられたあと、やっと京都について、七条の駅のまへの宿屋のそまつな部屋におちついた時には、思わず両手を顔にあててはげしく泣いた⁽¹⁹⁾」。

また、こう書いている。

「はじめて京都にのぼったとき私は苦学の決心を固めて居た。両親の意志にも反き、すべての親戚たちに反いて、ただひとり哲学を志し秘かに家をぬけ出したので、いまから思ふと夢のやうでは有るが、しかしそのとき私はまるではち切れるやうな悲痛な希望に燃えてみた。⁽²⁰⁾」

三高の入学試験では自信のあった英語で失敗し、不合格を覚悟していたが、合格することができた。京都に残った友人からの合格電報を受け取ったタカクラは、飛び上がってよろこんだ。

三高に入学できたことは、さすがに反対していた親戚の人たちにも大きな影響を与え、学費を援助してくれることになった。タカクラは、こう書いている。

「親戚たちが学費をだしてくれることになり、苦学はしないですんだ。当時の一カ月の学費が十一円、十円を親戚から借り、一円をわたしの家がだすということだったが、その一円ができなくて、両親も、わたしも、苦勞した。⁽²¹⁾」

こうして、京都での生活が始まった。

註

- (1) タカクラ・ツウ「自伝草稿」(1955年) 116頁。
 - (2) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」(『前衛』第304号、1970年2月)、163頁。
 - (3) 米山光儀「タカクラ・テルの半生—大衆から学んだ知識人—」(山手英学院『紀要』第12号、1982年) 72頁。
 - (4) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、118～119頁。
- (p.119)
- (5) タカクラ・テル『愛と死について』葦会、1951年、125～126頁。
 - (6) タカクラ・テル「故郷を思う」(『高知民報』第650号、1982年1月1日)。
 - (7) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、119頁。
 - (8) 高倉テル「ミイラ取りの話」(『国語運動』第1巻第3号、1937年) 43頁。
 - (9) 小林利通「タカクラ・テルについて—その思想形成—」(『自由大学研究』第4号、1975年) 4頁。
 - (10) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、163頁。
 - (11) タカクラ・テル「中江兆民・幸徳秋水など」(『日本近代文学大系月報 42』第50巻付録、角川書店、1973年)。
 - (12) タカクラ・テル『ニッポンの女』(理論社、1951年) 11～13頁。
 - (13) タカクラ・テル『ニッポンの女』前掲、13頁。
 - (14) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、163頁。

- (15) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、121頁。
(16) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、122～123頁。
(17) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、123～125頁。
(18) 小林利通「タカクラ・テルについて」前掲、6頁。
(19) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、163頁。
(20) 高倉輝「京都」(『詩と音楽』1923年7月号)80頁。タカクラが哲学を学ぶ場所として京都を選んだことについて、次のように書いている。
「私が特に京都を選んだ動機はそれは実は随分と他愛ないものだった。当時私は虚子の『鶏頭』を愛読して、その一節ほとんど全部暗記するほどに何度も反覆して読み耽った。あの中の「風流織法」や「斑鳩物語」やまたは「八文字」やはどれだけ私を京都を中心とした関西地方に憧れさせたか分からない。それからまた「すれちがふ舞妓の顔や朧月」と言ふ紅葉の句、或は「清水へ祇園をよぎる薄月夜今宵あふ人みな美しき」と言ふやうな晶子の歌、さう言ふものが一緒になって夢のやうに美しい京都を私の幼い頭のなかに描き出さして居た。そしてそれが一も二も無く私を京都へ走らせたのである」(高倉輝「京都」前掲、82頁)。
(21) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、164頁。

3 三高時代

タカクラは、1909(明治42)年9月、第三高等学校一部乙類に入学した。この三高時代は、文学への志望をしだいに固めた時期であった。三高時代のことを、こう回想している。

「学校では、語学の予習に苦しみながら、さっそく哲学や宗教の本を読みふけたが、さっぱり意味がわからず、なんとも近づきにくかった。当時、清沢満之を中心に、暁鳥敏・多田鼎・伊藤証信などの「浩々洞」の真宗の新しい運動や、綱島梁川の「回光録」のキ
(p.120)

リスト教の新しい運動など、あるていど宗教改革の要素をもった運動がおきていたが、そのほうが、まだしも、わかりやすかった。

ちょうど、そのとき、田山花袋・島崎藤村・岩野泡鳴・島村抱月などの自然主義文学運動が大問題になっていて、人生にたいする「幻滅」・「現実暴露の悲哀」・「世紀末」・「デカダン」などということばに初めてぶつかった。そして、すっかりそのなかへ引きこまれ、ここにしんけんな人生問題があると信じ、そういう作品、とくにフランスとロシアの文学の作品をねっしんに読みふけた。その結果ツルケーネフ・ドストエーフスキー・トルストイ・チャーホフなどの作品の人生にたいする観察の深さに驚き、京都大学へは行ってロシア文学を研究しようと決心した。……

こうして、わたしの生涯の方針は、哲学から文学へと、大きくかわった。そして、それも、やはり、人生問題がきそだった。⁽¹⁾

当時の三高には、英語の平田禿木・厨川白村、ドイツ語の片山弧村・茅野蕭蕭・成瀬無極などの文学者がいたが、タカクラは、なかでも平田禿木と厨川白村から深い影響を受けた。オックスフォード大学から帰ったばかりの平田禿木からは英語を教わり、「ことばと

「^{ママ}ゆうものにたいして目^{ママ}お開⁽²⁾かれた」という。また、厨川白村が文科の学生でつくっている「文学会」で講義した「近代文学論」から大きな影響を受けた。この講義で「初めて^ヤやや具体的に芸術といふ観念を捕捉する事が出来るやうになり、且つ読む可き本の大きな指針を得た⁽³⁾」のである。そして、「人世問題を解決しようとする方向が哲学から文学へ大きく変⁽⁴⁾つていった。

3年生のとき、ヨーロッパから京都帝国大学へ帰ってきた上田敏からも影響を受けた。タカクラは、こう書いている。「大学の科外の金曜講座と言ふので「現代の芸術」と言ふ講義を続けられました。作者〔タカクラのこと〕はまた熱心にこの講義を聴講いたしました。そしてまたそれから非常な影響を受けました。それが動機で京都大学の英文科に入学することになりました⁽⁵⁾」と。

京都では、タカクラは、毎日のように京都の町を歩き回り、また、下宿を変えては京都の風物を楽しんでいた。そして、暇をみては野球をやったり、比叡山や高野山にのぼり、また、キリスト教や仏教、とくに禅宗の本を読んで、滝に打たれたり、坐禅を組んだり、茶の湯に凝ったりした。

当時は、森鷗外・夏目漱石・永井荷風などが活躍していた時代であるが、タカクラは、これらの作家の作品をはじめ、二葉亭四迷や国木田独歩などの小説を克明に読んでいます。なかでも荷風の作品に刺激を受け、フローベル・モーパッサン・レニエの小説やヴェルレーヌの詩をフランス語で読んだりした。

この三高時代の同級生には、久松真一や大庭米次郎・中村直勝などがいて、学問の上の友人となった。また、下級生である末川博と一緒に大学から講師を呼んで「文芸講演会」を開いたりした⁽⁶⁾。

タカクラは、夏休みには必ず帰省をして、両親をよろこばせた。父親の輝房は骨膜炎に
(p.121)

かかり家で療養しており、母親の美弥が、養蚕や畑作のほか、豆腐やトコロテンを作って売ったり、道路工事の日雇いをしたりして、家計を支え、タカクラの学費を作りだしていた。タカクラの乗った小さな船が故郷の近くの港に着くと、うれしそうに迎えに出ている母親の姿が船からも見えた。この瞬間が、親子にとって、一番たのしいときだったという⁽⁷⁾。

1910(明治43)年、大逆事件が起こる。6月1日に幸徳秋水が検挙され、母多治子が上京して面会したのが11月27日、その1カ月後の12月28日に病死。秋水の処刑が行われたのは翌11(明治44)年の1月24日であった。幸徳母子と親しかった美弥は、タカクラによれば、「天皇暗殺はでっちあげで、幸徳のほう⁽⁸⁾が暗殺されたのだ」と言っていたという。幸徳家と関わりのある者は、親戚・知人はもちろん、町中が息をひそめて、墓を訪ねるのさえ恐れたときである。この美弥の見識は尋常のものではない。3年生のタカクラも、「心の底から腹をたてたが、しかし、それは、正義心からくるただの義憤で、幸徳の刑死⁽⁹⁾の社会的、歴史的意義はちっとも理解していなかった」。タカクラが『平民新聞』や秋水の著書・手紙に直にふれたのは長野県上田へ定住してからのことである⁽¹⁰⁾。

この1911年5月、タカクラの書いた文章が初めて活字になった。『新小説』5月号で生田長江が選者で文芸小評論を募集した懸賞論文で、「その第一回に投書して当選し、大い⁽¹¹⁾によろこんだ」という。タカクラの「日本の国民性と其文学」がそれで、二等当選であった。一等当選は佐藤春夫の「『日本人脱却論』の序論」である。春夫の評論は、ニーチェ

の『ツアラトウストラ』を「危険なる洋書」と非難する日本は、唯一の文明は「江戸っ子」のそれであり、宗教は「あきらめ」を説き、「長いものに巻かれた」歴史しかなく、「一世紀の文明を十年で輸入する人種」だと冷評し、「日本人は超人たらん前に先づ一度日本人を脱却しなければならぬ」と主張したものである^(1,2)。一方、タカクラの評論は、「時代思潮が一国の文学を縦に貫くものとするれば、其国の国民性は是を横に貫くものと日って良からう。時代思潮が文学を彩って行く力の太なるは日ふまでもないが、全く別様の彩色を施されても、単に色彩を変へたに止つて其国民性は毫も其形を変ぜぬ場合が多い」とし、自然主義にしても、独と仏とは違い、露国のものは「全く別種の感がある」のは「国民性」による、と始めて、日本は南国の国民性だから文学も深刻ではないとし、西鶴よりも近松が、チエーホフよりもモーパッサンが好まれることや、『罪と罰』が日本に移植されて『破戒』が生まれるようでは「自分は満足する事は出来ない」と述べて、「自分は、外国文学の借着でなくて、我々日本人の胸にしみじみ感じさせる作物が欲しい。アミュウジングの意味でなく、インテレスチングの意味で、真に我々に『面白い』作物に接したい」と結んでいる^(1,3)。文学の傾向を時代思潮だけでなく国民性によるものと指摘する点は卓見であり、いわば国民文学論の提唱である。これに対する長江の短評は、「国民性の影響するところは正に論者の言ふが如きものである。しかしながら、それを超越しやうとする苦しい努力の意義をも併せて考へなければなるまい。借着ならざる物を求むるのはいいが、此の如き老成の風ある要求の中に、動もすれば、軽薄なる保守的的反動に好辞柄を供するやうな危険が潜んで居るではないか^(1,4)」とある。

(p.122)

そのころ『ツアラトウストラ』訳出に没頭し、その世界と『資本論』の世界を交流させようと揺れ動いた長江と、日本人を脱却してひたすら芸文の道を歩いた春夫と、そして、泥臭い国民の読者のひとりとして、「面白い」作品に接したいというタカクラの行動の軌跡と、ある意味では近代日本文学のそれぞれの流れを代表するものといえなくもない。いずれにせよ、20歳のタカクラの最初の主張は、小林利通がいうように、「意外なほどその思想の核心に位置され」、長江の短評も、タカクラの「その後の生涯に暗示的であった」といえる^(1,5)。

それから1年後の1912(明治45)年5月、タカクラは三高を卒業した。

註

- (1) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」(『前衛』第304号、1970年2月)、164頁。
- (2) 高倉テル「ミイラ取りの話」(『国語運動』第1巻第3号、1937年)43頁。
- (3) 高倉輝「著者より読者へ」(『女人焚殺』アルス、1922年、付録)5頁。
- (4) タカクラ・ツウ「自伝草稿」(1955年)134頁。
- (5) 高倉輝「著者より読者へ」前掲、5頁。
- (6) タカクラ・テルより聴取(1983年10月24日)。長男の高倉太郎氏によれば、「三高の時代、文芸面を除いて、父のほんとうの親友と言えたのは、久松真一(元花園大学教授)、末川博(元立命館大学総長)だけだったのではないだろうか?そして、三人とも人生問題に悩んでいた」(高倉太郎「父と子の最後の対話」『衣笠』第6号、1987年、205頁)。

- (7) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、137～145頁。
- (8) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、164頁。
- (9) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、164頁。

タカクラが大学時代に秋水の墓を詣でたあとに書いたと思われる原稿にも、「小生の母は少時秋水と相識の間に御座候ひき。且つ母は秋水の母とも親しかりしものと見え、度々その人と成りを賞揚致し候を聞き申し候」と述べつつ、「小生は遂に秋水の文章を読みたる事無之候。随って秋水に関しては全く知る所無之候。只だ其の文章の非常に簡潔にして透徹したる点を良く故郷兆民の遺鉢を伝へたるものとして何人かの賞揚したるが記憶に止まり居候位に御座候。秋水が大逆の罪に坐して死を得るに至り候までの消息も小生の記憶は甚しく明瞭を欠き居り申し候。かの斯くまで一世を動かし申し候大事件も何故か当時小生の心を深くは牽かざりしと記憶致し候。当時小生は高等学校の学生にて候ひき」と書いている（高倉輝「幸徳秋水の墓に詣づるの記」）。

- (10) タカクラ・テル「中江兆民・幸徳秋水など」（『日本近代文学大系月報 42』第 50 巻付録、角川書店、1973 年）。
- (11) 高倉テル・森田草平「文芸放談」（『世界評論』一九四九年一月号）。
- (12) 佐藤春夫「『日本人脱却論』の序論」（『新小説』第 16 年第 5 巻、1911 年 5 月号）164～165 頁。
- (13) 高倉輝「日本の国民性と其文学」（『新小説』第 16 年第 5 巻、1911 年 5 月号）165～167 頁。
- (14) 生田長江「評」（『新小説』第 16 年第 5 巻、1911 年 5 月号）167 頁。
- (15) 小林利通「タカクラ・テルについて—その思想形成—」（『自由大学研究』第 4 号、1975 年）8 頁。

(p.123)

4 京大時代

1912（大正元）年 9 月、タカクラは、京都帝国大学文科大学英文科に入学した。英文科の主任教授は上田敏である。

タカクラが京都大学に進学したのは、当時の京都大学にはロシア文学科がなかったので、英文科に籍を置いて、ロシア語とロシア文学を専門に研究しようと考えていたからである。大学 1 年目のロシア語の講師は、ロシアで直接トルストイに師事したことがある小西増太郎で、トルストイと共訳の『老子』があり、それを教科書にも使った。講義には、初め大勢出ている聴講生も、すぐに減ってしまい、最後まで残ったのは山内得立と須田国太郎とタカクラの 3 人であったという。こうして、タカクラは、ロシア語とロシア文学の学習に努力を集中していった。⁽¹⁾

2 年目にロシア語の講師が山口茂一に変わった。山口は、ロシアで育った日本人で、ペチュルブルク大学の東洋語学科を出て日本へやってきたばかりであり、日本語はほとんど出来なかった。そのうえ、教え方がひどく厳しかったので、最後に残った聴講生はタカクラひとりになったという。この山口はすぐれた学者で、タカクラは二つのものをえたという。「一つは、プーシキン・レルモントフ・ゴーゴリ・チェルヌイシェフスキーなどのロ

シア文学の古典の研究の道をひらかれたこと、もう一つは、ロシア語を言語学的に学ぶ方法をあたえられたこと」であった⁽³⁾。

タカクラが大学時代に大きな影響を受けた講義は、新村出の言語学の講義で、山口茂一からえたロシア語に関する知識と結びつき、これが、のちにタカクラを日本語の言語学的研究に向かわせることになる⁽⁴⁾。ほかに榊原三郎からラテン語、深田康算からギリシア語を学び、サンスクリッドやバリー語は少しばかりだが独習した⁽⁵⁾。

そのほか大学では、文学の上田敏、英文学の厨川白村、支那学の狩野直喜、考古学の浜田青陵、のちには宗教哲学の波多野精一、哲学の西田幾多郎などの講義にも出ていた⁽⁶⁾。

講義の合間には、高校時代と変わらず、京都の町々を歩き回り、めったに人の行かないような場末の路地まで入り込み、また、スポーツや旅行をしたりして学生時代を送っていた⁽⁷⁾。そのほか、細田枯萍らと「イプセン研究会」を組織し、上田敏・菊池寛なども出席し

てディスカッションをしたりした⁽⁸⁾。

1915(大正4)年、タカクラは卒業予定の年となったが、英語のイギリス人教師とシェイクスピアについて論争し、「こんな不勉強な教師は相手にならない」と愛想をつかし、授業をボイコットしたため、出席日数が足りなくなり、単位を落としたこと、また、卒業論文も出さなかったため、1年留年することになった⁽⁹⁾。

卒業が1年遅れることになったため、菊池寛と同期になる。1913(大正2)年4月に佐野文夫の窃盗の罪を着て第一高等学校を中退した菊池は、同年9月に京都大学英文科選科に入学し、翌年本科に転じていた。京大時代の菊池は、「耽美享樂の芸術世界に遊び、京

(p.124)

都芸術復興運動の夢にひたすら精神を高揚させようとするロマンチストであった⁽¹⁰⁾」といわれるが、一高同期の芥川龍之介・久米正雄たちの第三次『新思潮』に参加し戯曲を発表したり、『不二』新聞・『中外日報』にさかんに文章を発表していた。しかし、京都芸術復興運動の夢は挫折し、経済的困窮に苦しみ、作家としての功名心に燃え、東京の仲間たちへのあこがれが京都での周辺への侮蔑となって、孤独の中に日々を送っていたころである。タカクラは、「菊池寛とは教室で顔を合わせる程度で、ほとんど付き合いがな」かったというが、菊池が容貌コンプレックスをもっていたことを感じ取っていたと思われる⁽¹¹⁾。

タカクラと菊池は、1916(大正5)年7月、京都大学を卒業した。タカクラは「グレゴリー夫人の作物」を、菊池は「Hankin, Barker and Galsworthy」を卒業論文とした。タカクラの卒論は、アイルランドの文学を取り扱ったもので、審査をした島文次郎・上田敏からは、グレゴリーの作品を全部読んでいるというのでほめられたという⁽¹²⁾。卒業式は7月13日であったが、この日は東京谷中の墓地で上田敏の葬儀がいとまた日でもあった。

菊池は、1916(大正5)年2月に創刊の第四次『新思潮』に参加し、10月には時事新報社に職を得て、その後数多くの作品を発表して、文壇への地歩を築いていった。

一方、タカクラの方は、引き続き京都大学に残った。法科の国際私法研究室の嘱託となったのである。タカクラは、初めての戯曲「赤い鍵」を(『科学と文芸』第1巻第4号、1915年12月)に発表していたが、まだ創作への道を決心していたわけではなかった。のちにタカクラが作家への道を歩もうとするとき、菊池と衝突することになる。

この間、卒業間近の16年5月、ロシアの詩人バリモントが来日し、数週間滞在した。

このとき、山口茂一が会えなかったため、かわってタカクラが接待した。京都大学京都文学会の機関誌『芸文』第7年第6号(1916年5月)にバリモントの肖像画と手蹟の口絵が出ているが、その紹介・解説はタカクラが書いている。そして、日本を去ったバリモントがウラジオストックのホテルから山口茂一宛に、最近の著書と詩や手紙を送っているが、その詩三編(「さむらい」「日本の女に」「日本に」)は『芸文』第7年第8号(1916年8月)に山口茂一が「バリモント氏の日本に関する詩」と題して紹介している。その詩の日本語訳は、「前に私の講義の聴講生で有つた高倉輝君の手を借りて翻訳発表⁽¹³⁾」したものである。これから5年間にわたるタカクラの研究時代が始まる。

註

- (1) タカクラ・ツウ「自伝草稿」(1955年)145～146頁。

タカクラは、京都丸太町にあった本屋「西川誠光堂」によく立ち寄っていたが、女主人の西川ハルに、ロシア語の授業について、「俺が行ってやらないと、先生は授業にならないのだからなァ、サボるわけにはいかんのや」と、生意気な口を聞いていたという。ハルは、タカクラのことを「テルさん」と呼んでいた(松木貞夫『本屋一代記』筑摩書房、1986年、307～308頁)。

- (2) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」(『前衛』第304号、1970年2月)、164～165頁。

- (3) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、165頁。

(p.125)

- (4) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、165頁。

- (5) 高倉テル「ミイラ取りの話」(『国語運動』第1巻第3号、1937年)43頁。

- (6) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、145～146頁。

タカクラは、西田幾多郎の講義を聞いたころのことについて、こう回想している。

「教室で、講義おするときにも、よく、五分も十分も、だまりこんで、教壇を右から左え、左から右えと、行ったりきたりする。それから、やっと、思いだしたよーに話しだす。ずいぶんかわっていたし、それが、また、ひどくえらそーに、哲学者らしく見えた。

だが、ニシダの講義から、わたしわ全くえいきょーお受けなかった。その頃のわたしわ、どだい、哲学というものに興味おもっていなかった。……

多くの学生と同じく、わたしも、しきりと、観念的な人生の問題になやみ、文学の方向に迷うという、まことに古ぼけた平凡な学生だった。そーいういみから、ニシダの哲学にも、たいして心を引かれなかった。それに、講義を聞いても、著書をよんでも、だいいち、むずかしくて、よくわからなかった。」(タカクラ・テル「ニシダ・キタロー」『文学論・人生論』タカクラ・テル名作選Ⅴ、理論社、1953年、281頁)。

- (7) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、148～149頁。

- (8) 成瀬無極『無極集』(成瀬先生記念刊行会、1959年)455頁。

- (9) 高倉太郎氏作成「タカクラ・テル年譜」。タカクラ・テルより聴取(1981年11月21日)。

『大原幽学』(タカクラ・テル名作選Ⅲ、理論社、1953年)の巻末年表には「卒業試

験のまぎわに、チブスにかかり、四十日間、高熱とたたかう。このため、卒業^{ママ}わ一年おくれることになった」とあるが、誤りである。タカクラがチブスにかかったのは京大嘱託時代である。高倉太郎によれば、年表の「『卒業試験のまぎわにチブスにかかり』とありますのは、祖母から母へ言い伝えられたときの誤りで、私が父から聞きましたところでは、嘱託のころ、厨川白村から懸賞小説の代選を頼まれましたとき、その原稿にチブス菌がついていたらしく、そのためにチブスにかかったのではないかとのことでした」という(山野晴雄宛高倉太郎書簡、1987年4月20日付)。

(10)片山宏行『菊池寛の航跡－初期文学精神の展開－』和泉書院、1997年、35頁。京都時代の菊池については、同書を参照のこと。

(11)山野晴雄宛高倉太郎書簡(1984年9月25日付)。同書簡によれば、タカクラは「菊池はひじょうにみにくい顔をしていたので女にもてず……」と話していたという。

(12)タカクラ・テルより聴取(1981年11月21日)。

(13)山口茂一「バリモント氏の日本に関する詩」(『芸文』第7年第8号、1916年8月)19頁。

5 京大嘱託時代

1916(大正5)年7月、タカクラは、法科の国際私法研究室(主任跡部定次郎)の嘱託(p.125)

となった。指導教授であった上田敏が7月5日に亡くなったため、かわって言語学の新村出が指導教授となり、その推薦で嘱託となったのである。当時、新村は、山口茂一を中心にロシア文学を独立させようという計画をもっており、そのためにタカクラを残したとい⁽¹⁾う。月給は30円で、はじめて自分で生活することになった。

タカクラは、大学院の講義を聞きながら、ロシア語とロシア文学の研究を続けた。

夏には、暑い京都を避けて、比叡山で一夏を過ごしたりした。1918(大正7)年の夏には、経済学部の学生であった山内義雄と過⁽²⁾ぎしている。

ようやく生活が少し楽になってきたとき、タカクラは、二つの新しい方向を模索しはじめるようになっていた。タカクラは、こう回想している。

「わたしのからだには、やがてまたもや生涯の方針を根本的に変えなければならない、二つの要素、しかもまったく矛盾した二つの要素が生まれていた。一つは、文学の研究から文学作品の創作へすすみたい欲望がしだいに強くなっていたこと、もう一つは、社会問題⁽³⁾にたいする関心が新しく生まれていたことだった。」

創作を志しはじめたタカクラは、芸術全般にわたって専門的な研究をするようになった。劇場や寄席に通って、歌舞伎や落語、講談、女義太夫などを、いちいちノートにとったりした。また、常磐津の師匠に直接ついて三味線を習い、芸者の温習会にもよく出かけていった。花柳界も、京都の祇園や、その他の遊郭へ入り込んで、かなり深く研究した⁽⁴⁾。その当時の生活をタカクラは、長編小説『阪』(上巻・下巻、アルス、1926年)の中で書いている。

ロシア語の講師であった山口茂一とは特別に深く結びつき、大学卒業後も交流が続いて

いた。その山口が肺結核になった。18年の春から冬にかけて、タカクラは、神戸の山口の自宅へ通って、看病かたがた、ロシア文学と言語学を教わっていた。タカクラは、こう書いている。

「自分は殆ど毎週一度づゝ神戸の先生のお宅へ伺つて、言語学の講義を聞いた、これは一週間中の質問を持つて行く序での先生の好意で有つた、其の意味は後になつて初めて本当に分かつたが自分の下手な露西亜語も兎に角此の御蔭で漸く物を読むだけには不自由をしなくなり、同時にこれまで自分が言葉と言ふものに就て全然考へて居なかつたと言ふ事が分かつた。」⁽⁵⁾

山口茂一は、1919(大正8)年9月、ア・デ・ルードネフ著『蒙古文典』を翻訳し、満鉄から出版した。「序」に「翻訳の助力を受けたる高倉輝氏」とあるが、実際は、日本語がほとんど出来なかつた山口にかわつて、タカクラが翻訳したものであつた。

山口の病気がしだいに悪化し、大学病院に入院することになったが、その入院費用は四国の母親や叔父に頼んで作ってもらつたものであつた。⁽⁶⁾20年3月、山口は、病院の片隅でさびしく亡くなつたが、最後までその世話をしたのがタカクラであつた。のちにタカクラは長編小説『蒼空』(アルス、1923年)を著すが、これは、山口をモデルに二人の交流を題材にしたものである。

タカクラは、山口を追想して「山口先生と自分」(『芸文』第11年第6号、1920年6月)
(p.127)

という文章を書いているが、その中で、「先生の死は自分に取つては太陽の一つが消えた様なものである。自分はもう露西亜文学に就ては何人の教へにも服する事が出来ないで有らう、言はば先生は自分には余りに善すぎる勿体ない先生で有つた」と書いている。⁽⁷⁾そして、タカクラが山口からえたものは、ロシア語だけではなかつた。タカクラは、「露語は自分が先生に教つたものゝ一部に過ぎなかつた」と書いているが、山口を通じて初めて「ロシア的情熱」というものにふれたのである。それは、タカクラの生涯を左右するほどの大きな意味を持っていた。

タカクラの最初の著書となつた、エウレーノフやバリモントの作品をロシア語から翻訳した『心の劇場』(内外出版、1921年)は、「恩師山口茂一先生」に捧げられており、その「はしがき」で、「訳者は故山口茂一先生に六年間露西亜語を教はつた。併し今から思へば露語は訳者が山口先生から受けたものゝ極く一部に過ぎなかつた。訳者は嘗て山口先生に愛せられたほど人に愛せられた事が無く山口先生を愛したほど嘗て人を愛した事が無かつた。今故人の一周年に際して其の霊前に此の書を捧げ得ることは訳者に取つては実に言ふ可からざる悦びである」と書いている。

社会問題への関心は、1917年にロシア革命が起こつたことと、研究室で河上肇に近づいたこと、この二つことがタカクラを「ゆり動かした」ことが大きな契機となっている。

前者について、タカクラは、こう書いている。

「プーシキン・ツルゲーネフ・ドストエーフスキーなどの作品には、農民の反乱や革命運動がいろいろの形で現れる。ロシア文学が、それまでのニッポン文学などちがひ、社会問題を大きく取りあげていることに、ますます深くひきつけられ、社会問題にたいするわたしの関心はしだいに大きくなつていた。しかし、それらは過去のことであり、文学の内容のことであつて、現実のことではなかつた。現実に大革命がおきたということは、新

しい大問題で、すっかりわたしを困惑させた。

革命の内容についても、理論についても、さっぱりわからなかった。あわてて勉強しようとしたが、見当がつかなかった。マルクス・エンゲルス・レーニンなどの本は、まだ、ちっとも訳されていなかったし、まわりに知っている人もいなかった。ロシア語の山口さんに聞いても、要領をえなかった。⁽⁹⁾

タカクラは、ロシア革命についても、社会主義についても、まだ理解できない状態にあったが、そうしたところへ研究室の近かった河上肇がはじめてタカクラの研究室を訪ねてきた。ロシアの革命家プレハーノフのロシア語の読み方について聞いてきたのである。そのころプレハーノフは、外国のつづりが、Plechanov, Plekhanof といろいろであったことから、日本の雑誌や新聞も「プレチャーノウ、プレカーノフ」とさまざまに書かれていた。河上は、どれが正しいか、と質問してきたのである。⁽¹⁰⁾

これがきっかけで、タカクラは、河上とつき合うようになった。京都の南座では、河上肇夫妻とよく出会ったが、そのころのことについて、タカクラは、こう回想している。

「カワカミ先生は芝居が非常にお好きだった。夫人といっしょに南座に行っていられる
(p.128)

のに、よく出あった。わたしは京都大学の演劇研究会の役員をしていた。

そうして劇場でお目にかかった翌日、よく、わたしの研究室へこられて、芝居の話をせられた。先生はそれを楽しんでいるように、わたしには見えた。⁽¹¹⁾

そして、タカクラは、河上から「ロシア革命についても、いろいろ教えてもらい、はじめて少しずつわかってきた⁽¹²⁾」。また、しだいに河上の文章にも関心を持つようになった。

だが、社会主義の理論にふれる中で、タカクラは、新しい大きな問題につきあたった。それは、「階級」と「階級闘争」、それと「革命」との関係であった。タカクラは、こう書いている。

「ずっともちつづけてきている人生問題のナヤミは、まだ、解決していないのに、新しくわたしのまえに立ちふさがった、この社会問題の壁は、それと、どういう関係にあるだろう？ そう思って、まったく新しいナヤミに苦しみはじめた。⁽¹³⁾」

ロシア革命の翌年、すなわち 1918 (大正 7) 年の夏には、米騒動が全国に広がった。京都でも、米騒動が起こり、一時は民衆が暴動化した。ちょうどその日、「四条通の南座の芝居を見に行っていた」タカクラは、「鴨川のすぐ上になつている食堂で飯を食つてい」たが、そこで、「暴動化した大衆の一団がどつと四条通を進んで」きて、四条大橋を渡っていったのを見ている。⁽¹⁴⁾

社会問題とどう向き合い、どう生きていくのか。その新しい悩みに苦しんでいたタカクラは、直接自分の目で米騒動を見て、いっそうその悩みを深くした。

そのころのことを、タカクラは、こう回想している。

「文献を読んでも、河上さんにたずねても、どうしても解決しないものが根づよくのこった。ロシア文学の研究にも、まえのような熱意がもてなくなった。プーシキンとゴーゴリの評伝を京都大学・文科の機関誌『芸文』にのせて、列伝体のロシア文学史をつくる計画だったが、それも途中でやめた。大学でやっている学問の研究にも、興味を失った。この時が、わたしの一生で、いちばん苦しく、いちばん大きく迷い、いちばん厭世的になった時代だった⁽¹⁵⁾」。

タカクラは、囑託時代には主として『芸文』に多くの論文や文章を載せていたが、上田敏の詩集『牧羊神』を論評した「『牧羊神』」(『芸文』第11年第12号、1920年12月)が『芸文』に載せた最後の文章となった。そして、自分の苦しみからのがれるように、創作にうちこんでいった。

1919(大正8)年10月、タカクラは、戯曲「砂丘」を『改造』第1巻第7号に発表し、翌年1月には戯曲「焰まつり」を『我等』第2巻第1号に、12月には戯曲「孔雀城」を『改造』第2巻第12号に発表した。⁽¹⁶⁾これらの作品によって、ジャーナリズムに受け入れられ、作家として認められるようになった。

戯曲「砂丘」は、海浜の療養院に結核で療養している主人公の松井が、前妻のれい子が同じ療養院に来ている事を知り、妻ののぶ子のいないときに逢って、自分の子どもを産んでいないか確かめるが、れい子と逢うことを知ったのぶ子は、友人の加世と一緒に松井

(p.129)

のもとを去ってしまうという物語である。

これには、厨川白村が次のような推薦文を書いている。

「いつも定期刊行物にあらはれる創作の主要部を占める短篇小説のほかに、最近また詩と劇にも注目すべき新作の公にせられるのを見る事は、文壇のために喜ぶべき現象である。……此さびれ果てた詩壇と劇界とに於ても、ここに清新の気を鼓吹し生気を与ふるものを求めれば、そはまた必ずやこれら新人の努力を待たねばならぬ。まだ文壇の評価を経ない未知数たる新進の士に、私たちが多くの期待をもつ所以はここに在る。恁かる意味に於てわたくしは高倉氏の此一篇を雑誌『改造』の主筆に薦めた。作者は数年前学窓を出でて後、なほ深く英露の文学を研究し、かたはら真摯の熱意を傾けて創作の筆を執れる人だ。この作の如きも、劇^{ド라마ティック}的^{シチュエーション}境遇をつくる可く『偶然』を用ひて未だ到らず、また稍々ロマンティック・センチメンタリズムに傾かんとする譏を免れずとするも、なほ其表現の上に飽くまでも頑固に自分を守らんとして十分の苦心をした痕がある事は何よりも頼母しい。初舞台に立つ debutant の足どりのどこかに、たとひ覚束なさはあらうともあらは見られようとも、飽くまで『詩』と『真』との間を踏み誤らじとする若々しい努力と熱意とには、人を動かすだけの力がこもる。この力は老巧な円熟した作家には却つて見られない⁽¹⁷⁾貴い力ではなからうか。」

戯曲「孔雀城」は、古代インドのアショカ王^{アショカ}を題材にしたもので、阿育王が、巡礼とともに孔雀城に戻ってきた盲目の王子鳩那羅^{クナアラ}を若き学者跋陀羅目呵^{メヅラムカ}を唆して殺そうとした王夫人の徴沙落起多^{チシヤラキタ}を焚刑にした物語である。

タカクラは、作家として、学者として、森鷗外には深く傾倒していた。「孔雀城」の中にアショカ王碑の碑文を挿入する関係で、森林太郎・大村西崖『阿育王事蹟』からの転載の許可を得たが、これが機縁で鷗外と文通を始めた。また、タカクラが傾倒していたもう一人の作家である永井荷風とも、このころから文通が始まった。⁽¹⁸⁾

京都大学の成瀬無極を中心とした文学グループに参加していたタカクラは、よく宇治の「花やしき」で集まりをもったが、そこで関口泰らと既成の文壇批判をしたりしていた。⁽¹⁹⁾また、『文化』という機関誌を出す計画もあった。それだけに、新進の作家として認められるようになったことは、独立する気持ちをいっそう高めたに違いない。

1921(大正10)年、大学の空気に嫌気がさしていたタカクラは、指導教授の新村出がヨ

ヨーロッパへ海外出張している間に、大学の嘱託をやめてしまった。そして、京都の町から離れ、滋賀県石山にある琵琶湖に面した別荘を借りて、創作にうちこむことにしたのである。

註

- (1) タカクラ・テルより聴取(1981年11月21日)。
(2) 山内義雄によれば、「その夏は東京に帰らず、京都で夏をと思っていたわたしのところへ、ある日、勉強するといつて比叡山に上っていたタカクラ君から「上って来ないか」という葉書がきた。そして、その夏、二人は、根本中堂上の茶所前にあった大黒堂で暮

(p.130)

らしたという(山内義雄『遠くにありて』講談社文芸文庫、1995年、106～107頁)。タカクラによれば、近衛文麿も家族を連れて比叡山にきていたという。タカクラらは、精進料理には弱り、茶所をやっていた管長の妾と掛けあって、肉や魚を取り寄せ、「本堂で、大いにすきやきをやったり、うなぎを食ったりした」。また、中堂の前の広場で、「野球をやったり、ぼん踊りを開いたりして、神聖なエイザンをさんざんにした」(タカクラ・テル「コノエ・フミマロ」『文学論・人生論』タカクラ・テル名作選V、理論社、1953年、270～271頁)。

山内義雄によれば、翌年(1919年)の夏も、二人で根本中堂の北、北谷にのぞんだ坊を借りて過ごした。そのときのことを、次のように回想している。

「すでにそのころから、タカクラ君のロシア語はどうやら本物になっていたらしい。それにロシア文学への造詣も。そしてわたしは、エヴレイノフの『心の劇場』の話をかきかされて驚嘆し、アレクサンドル・ブロークの詩を教えられて賛嘆し、ドストイエウスキーを論じてはいつも圧倒された。わたしは、何くそとあって、カマンスキーの『ドストイエウスキー』や、仏訳の『白痴』、『虐げられた人々』などを取り寄せて立ち向かった。だが、とうていタカクラ君には歯が立たなかった」(山内義雄『遠くにありて』前掲、107頁)。

- (3) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」(『前衛』第304号、1970年2月)、165頁。
(4) タカクラ・ツウ「自伝草稿」1955年、155～156頁。
タカクラは、京都の南座によく観劇に行っていたが、1918(大正7)年には、南座四月公演の観劇記を書いている(「南座観劇記」『演芸画報』第5年第5号、1918年5月)。
(5) 高倉輝「山口先生と自分」(『芸文』第11年第6号、1920年6月)88～89頁。
(6) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、157～158頁。
(7) 高倉輝「山口先生と自分」前掲、89頁。
(8) 高倉輝「山口先生と自分」前掲、86頁。
(9) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、165頁。
(10) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、166頁。タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、164頁。
(11) タカクラ・テル「カワカミ・ハジメ先生のこと」(『河上肇全集』第27巻・月報27、岩波書店、1984年)1頁。

- (12) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、166頁。
- (13) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、166頁。
- (14) 高倉テル「議事堂という所」(『政界ジープ』第2号、1946年9月) 28頁。
- (15) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」前掲、166頁。

タカクラは、1917年3月・4月に「プーシキン評伝」を2回にわたり掲載し(『芸文』第8年第3号、第4号)、1918年9月から20年2月まで「ゴオゴリ評伝」を6回にわたり掲載している(『芸文』第9年第9号、第11号、第10年第4号、第6号、第12号、第11年第2号)。

- (16) タカクラの「孔雀城」が掲載された『改造』第2巻第12号(1920年12月)は、そのころにはない売れ行きを示したという。初めてアインシュタインの「相対性理論」を紹介した石原純の論文「時間及び空間の相対性」と、タカクラの「孔雀城」であたったと
(p.131)

いうので、改造社の社長山本実彦がタカクラを訪ねてきて感謝の意を示したといわれる(タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、59～60頁)。

- (17) 厨川白村「戯曲『砂丘』に題す」(『改造』第1巻第7号、1919年10月) 108頁。
- (18) タカクラが森鷗外と永井荷風に傾倒していたことを、こう書いている。「日本の作家の中で終始変らず作者〔タカクラのことー引用者〕が特別に愛読いたしますのは森鷗外先生の総ての著作と『断腸亭雜藁』以後の永井荷風氏の諸作で有ります特に荷風氏の『おかめ笹』には特別に深く傾倒いたして居るのであります」(高倉輝「著者より読者へ」『女人焚殺』アルス、1922年、付録、7頁)。
- (19) タカクラは、1920年3月、土田杏村に宛てた手紙の中で、「宇治の会大成功遂に大部分宿泊徹宵現文壇不満の鬱憤を發しました。そして朝日の関口〔泰ー引用者〕君もこれからそのつもりで創作するので同じ朝日の春山君あたりが大いに力を入れる事になって是非とも関西に一旗あげる事に決めました。今の楽屋落文学を何でも打倒さなくちゃと言ふ所で夜が明けて了ひました」と書いている(土田杏村宛高倉輝書簡、1920年3月1日付)。

6 安田ツウとの出会い

京都大学の囑託をやめたタカクラは、滋賀県石山で創作活動を続けていた。1921(大正10)年の新緑のころ、成瀬無極を中心とした「文士会」が宇治の「花やしき」で開かれた。その席で、タカクラは、安田ツウ(津宇)とめぐりあうことになる。⁽¹⁾

安田津宇は、1899(明治32)年12月8日に、父宇兵衛と母きくの二女として生まれた。姉にとき、兄に徳太郎、弟に珪二がいた。安田家は、京都の三条大橋西詰めにあった「河内屋」という屋号の老舗の足袋屋であった。1903(明治36)年7月、父の宇兵衛が肺病で若死にしたため、家財を整理し、一家は京都の堺町に一軒を借りて移り住み、一時、ツウだけは大阪の叔父辰蔵の家にあずけられた。そして、翌04年5月、安田一家は宇治の「花やしき」の一角にある西離亭に移り、ツウも06年に大阪の叔父の家から「花やしき」に⁽²⁾いる母のもとに移り、小学校へ入学した。

「花やしき」は、山本亀松と多年夫婦が、別荘地として宇治川のほとりに大きな土地を買い込み、東京向島の「百花園」を真似た庭園をつくることにし、植木や西洋の草花を植え、小さな別荘を建てたものである。その後、離れを数軒建てて、「花やしき宇幾舟園」と呼び、園内を外の人にも開放した。多年は、ツウの父である宇兵衛の姉で、クリスチャンとなり、山本亀松と結婚、京都の新京極に「ワンプライスショップ」という看板を掲げ、小間物屋を開いて、リボン・ハンカチ・化粧品をはじめアメリカから取り寄せたハイカラな装身具類を販売したところ、これが評判となり、大繁盛した。そして、この夫婦のあいだに生まれたのが山本宣治である。⁽³⁾

自然に恵まれた環境のなかで、ツウは、周囲のあたたかい人たちに見守られながら成長
(p.132)

し、小学校を卒業した。「花やしき」では、「女というものは、専門の学校へ行かずに、ひととおりの遊芸を身につけて、結婚しさえすれば、それでよい」という方針であったため、津宇は、琴や三味線などの遊芸を身につけるかたわら、歌劇や演劇、歌舞伎などを見たり、伯父夫婦に連れられて各地を旅行したりして娘時代を過ごした。⁽⁴⁾

また、身近に山宣や兄徳太郎がおり、多くの文化人が「花やしき」に出入りしていたことから、しぜんに読書に興味を覚えていたツウは、暇さえあれば本を読んでいたが、中条百合子が『中央公論』に載せた処女作「貧しき人々の群」を読んだときには、同い年の18歳の少女がこのような小説を書いたことに感心したという。1920(大正9)年の秋、有島武郎が「花やしき」に来たことがある。これがきっかけで、有島は、『或る女』『惜しみなく愛は奪ふ』『宣言』など自分の著書をつうに送ってきたが、どの作品も「心にくい入るようなものは感じられなかった」という。その後も、何度かやって来たが、「男の子三人をかかえ、奥さんに早く先だたれたので、なんとなく、さびし⁽⁶⁾い影が見えてい」たことを、ツウは感じとっていた。

1921年の春、有島の母親幸子から、ツウを養女に、という話⁽⁷⁾があったころ、タカクラは、「花やしき」で開かれた成瀬無極の「文士会」に出席し、そこで初めてツウと出会った。⁽⁸⁾タカクラが30歳、ツウが22歳のときである。タカクラは、「花やしき」の人々から好かれ、安田の家族も、タカクラに対しては他人でないような気持ちをもつようになっていた。そしてタカクラは、読書の指導を頼まれるようになり、森鷗外・夏目漱石・二葉亭四迷・国木田独步・樋口一葉・永井荷風などの作品を念入りに読むようにすすめた。津宇は、一心に読書にうちこんだ。そのころのことを、こう回想している。

「一心に本をよんで行くうちに、わたしは、いつか、いままでの遊び気分がすっかりつまらないものになって、そういう世界より、人間として、もっと大事なものがよ⁽⁹⁾うな気がしてきました。きれいな着物をきたり、めずらしいものを食べたりするよろこびよりも、それこそ、真に人間的なよろこびがあるはずだという気がしました。タカクラに、『初めて、自分の心のとびらが開けてきたようです』と、手紙を書いたら、ひじょうに喜んで、返事をよこしました。」

こうして二人は、お互いに好意をいだくようになっていった。

そのころタカクラは、5月に最初の著書『心の劇場』を出版したあと、九州の天草まで出かけて資料を収集し、戯曲「切支丹ころび」の執筆に打ちこんでいた。ツウは、そのころのタカクラを、「さすがに、『キリシタンころび』になると、タカクラは、一字一句、

念を入れて、気のすむまで書きなおしていたので、その苦心が、日常の生活にまで、にじみでていました」と、回想している⁽¹⁰⁾。この「切支丹ころび」は『改造』第3巻第9号(1921年9月)に発表された。

ツウの母きくや伯母の多年は、二人の結婚について、タカクラが手続きを踏んで結婚式をあげるのであれば賛成であった。山宣も出席して親戚会議がもたれたが、それに対してタカクラは、次のような意味の手紙を書いた。

(p.133)

「自分は、地位も名誉もない。赤はだかの人間だ。また、家庭人でもない。ぼくを信じ、ぼくと同じように考えてくれる女なら、自分にとっては、かけがいのない女で、そういう女なら、一生にひとりでよい。ぼくは、創作を一生の仕事としてやって行く決心だ。自分との生活は、こじきの道ずれのようなものだ。形式をとって、周囲に喜んでもらうような結婚なんかしない。だから、着物や財産はいらない。はだかのきみをもらいたいのだ。」⁽¹¹⁾

ツウは、この手紙に、「もう自分の気持が行くところまで来たような気がして、心をきめて、すっかりおちついて」いた。しかし、周囲の親戚、とくに京都の義兄などがタカクラとの結婚に反対するようになっていた。⁽¹²⁾

タカクラは、作家として自立していくことと結婚問題と、その生涯の大きな転機に直面していた。『改造』の記者であった浜本浩に宛てて、自分の心情を次のように書き送っている。

「僕は多分明晩帰る積りです　そして石山へ行く積りです　打ち勝たなくてはならぬ苦しみがまだ無数に僕を待って居ます　力強く有る事のみが今僕を生かして居るのです……

宇治へ来るのもこれが最後に成るのでは無いかと言ふ気が頻りにします　やはり斯く言ふ事は色々からんで来ます　僕が相手の感情を例へ露ほどでも玩んではならぬと思つてあれほど用心した事は終に全く徒勞に了つたらしいのを僕は悲しみますが　併し全部の責任を僕が負つても　僕は断然もう宇治へ来ないか或は来れば来る様にしてはっきりさして置いて来ようと思ひます　結局今夜あたりで何とかします　僕の道は一筋ですから　大またにしっかり歩いて行くのです　真に僕について来ようと思ふ者のみが僕に従ふでせう」⁽¹³⁾

そんなタカクラに、一身上の変化が起きていた。9月17日、タカクラの父輝房が脚気のため鶴来島で急死したのである。⁽¹⁴⁾63歳であった。タカクラは、9月15日、「チチキトク」の電報を受け取ると、直ちに四国へ向かったが、父の死に間に合わなかった。

ツウは、父の死を悼むタカクラへの手紙の中で、結婚について、「反対者ができているし、いまの立場が苦しいので、どうにもならない」と、書き送った。

この手紙は、タカクラをがっかりさせた。父親には死なれる、借金は背負う、初めて自分を理解してくれた女性とも結ばれることが出来ない。そんな絶望的な状況に追い込まれていた。タカクラは、「自分のいまの苦しみを救ってくれる者は、きみしかいない。きみさえいてくれれば、自分は立ちあがることができる」と、ツウに書き送った。

ツウは、「どんなかんたんな形式でもよいから、式をやってください」と、返事をした。⁽¹⁵⁾

こうして、タカクラとツウは婚約をした。21年秋のことである。⁽¹⁶⁾ただ結婚は、タカクラが一周忌をすますまでは郷里の七郷村浮鞭にいたることになったので、1年先ということになった。

註

(1) タカクラ・ツウ「自伝草稿」1955年、56頁。なお、ツウについては津宇・通の表記があるが、本稿ではツウで統一する。(p.134)

(2) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、2～37頁。

(3) 佐々木敏二『山本宣治』上巻、汐文社、1974年、3～13頁。

(4) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、49～54頁。

ツウは、京都三条のキリスト会館では宝塚の少女歌劇の公演を、四条の南座では松井磨子の芸術座の「カチューシャ」、三浦環の「お蝶夫人」などを見ている。歌舞伎では、浄瑠璃の三味線を習っただけに、大阪の雁次郎の「紙屋治兵衛」、東京帝劇での松本幸四郎の「勸進帳」、そして羽左衛門の「直侍」は清元連中の冴えた三味線とともに、特別に記憶に残っているという。京都の公会堂ではメーテルリンクの「チルチル・ミチル」の外国映画を見ている。

(5) 「花やしき」に出入りする文化人には、近衛文麿・九条武子・有島武郎・西田幾多郎・成瀬無極・茅野蕭々・三木清・谷川徹三らがあり、それに混じってタカクラも出入りした。

(6) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、45～49頁。

ツウによれば、有島は雨の静かな日が好きで、「山も水もぬれけり 宇治の春の雨」という短冊をくれたことがあるという。ツウは、有島の印象を「じつに気のいい、どっちかという、あまい所のある方でした」と回想している。

(7) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、47～48頁。

ツウによれば、有島の母親幸子は、ツウを養女にして、文士の中戸川吉二のところへ世話したいということであったが、養女の話はそれきりになったという。

(8) その後、タカクラとツウは、ある晴れ上がった日、石山から宇治まで行く途中で、こんなことがあったという。身体の弱った一羽のカラスを拾い、ツウの家まで抱いてきて、鳥かごに入れたが、そのカラスは翌朝に死んでしまった。ツウは、山宣の子どもたちと、裏の畑にそれを埋めたが、その翌日、一枚の葉書を受け取った。「きのう、カラスが死んだ夢を見たが、どうなったか？」というタカクラからのものであった。これがきっかけとなって、二人の文通と交際が始まった(タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、56～59頁)。

(9) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、63～64頁。

(10) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、61頁。

(11) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、67～68頁。

(12) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、68～69頁。

(13) 浜本浩宛高倉輝書簡(1921年6月3日付)。

(14) 高倉太郎氏作成「タカクラ・テル年譜」。

(15) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、70～72頁。

(16) 高倉ツウ「夫とともにたたかいぬいた妻の人生」(新婦人しんぶん編『母の歴史』鳩の森書房、1970年)208頁。

(p.135)

7 自由大学への出講

1921(大正10)年の六月中旬に、タカクラは、土田杏村から、長野県上田周辺の青年たちが創設しようとしている民衆教育機関である自由大学への出講を求められた。

土田杏村は、東京高等師範学校を卒業したのち、1915(大正4)年9月に京都帝国大学文科大学哲学科に進み、西田幾多郎について新カント派の哲学を学び、18年9月には大学院に進学した。19年1月には、自己の思想的立場として社会主義と理想主義を結合した文化主義を主張し、日本文化学院をつくとともに、個人雑誌『文化』を刊行していた。⁽¹⁾

タカクラと土田が知り合ったのは、ロシア語の教室の中であった。タカクラが囑託をしていたときである。タカクラと土田とはたった二人で2年間、山口茂一からロシア語を教わった。⁽²⁾これが機縁となり、二人の交流が始まる。タカクラが『心の劇場』を翻訳・出版すると、土田は『文化』で紹介している。⁽³⁾

土田が長野県上田周辺の青年たちに協力して自由大学を創設することになった経緯は、1年前にさかのぼる。

長野県上田・小県地域は、大正デモクラシー運動の拠点の地域の一つであった。⁽⁴⁾この地域の青年たちは、デモクラシーの機運のもとで、山本鼎の自由画教育と農民美術運動、信濃黎明会の普選運動、各町村青年団による「時報」の刊行など、自由と解放へのさまざまな試みを起こしていた。自由大学は、この地域で創造的に生きようとする金井正・山越脩蔵・猪坂直一という三人の青年たちと、新しい文化運動の実現に意欲を示していた在野の哲学者土田杏村との人間的な交流の中からつくりだされたものであった。

自由大学の創造に取り組んだ金井・山越は、きわめて似た境遇にある文化的志向の強い青年であった。二人は、養蚕地域の神川村内の資産家のみならず、上田周辺でも有力な富をもつ蚕種農家の青年であった。

金井は、平民社の社会主義に共鳴し、『平民新聞』読者会を組織したり、同人雑誌『国分寺の鐘韻』を刊行したり、また1908(明治41)年に甲種合格のため入営を余儀なくされ村の青年が開いた送別会の席上で徴兵忌避と軍備拡張反対を訴え、15(大正4)年の村の軍人共励会で軍拡反対と普選実施を訴えた青年であった。その一方で、16年、小県教育会の哲学講習会に、費用の大半を負担して、西田幾多郎を招いている。金井は、中学時代から哲学に親しみ、専門哲学書のほか、『哲学雑誌』『哲学研究』などの学術雑誌、『中央公論』『改造』などの総合雑誌を愛読する⁽⁵⁾”考える農民”であった。また、山越も、先輩の金井から強い影響を受け、西田幾多郎・田辺元・リッケルト・ヴィンデルバントを愛読し、カント・ラッセル・レーニンなどを英語で読む哲学青年になっていた。

1916年、フランス留学を終え、モスクワを經由して帰国した画家山本鼎が、父が医院を開業する神川村に来ると、翌17年2月に会見し、山本の考えに共鳴して、19年、自由画教育と農民美術運動に取り組んでゆく。金井は、教育について、「人は誰でもいいもの
(p.136)

を有つて居る」「教育と云ふことはこのいいものを導き出す機会を与へること、銘々のもつて居るいいものに気付かせることだ⁽⁶⁾」と書き、子どものもつ可能性をひきだすところに教育の本質をみ、人間を鋳型にはめるような教育に批判的な考え方をもっていた。ま

た、山越は、「実際、社会改造とか云つても、根本的にやらなければ改造ではありません。決極教育の力でなれば駄目です⁽⁷⁾」と、教育による社会改造を考えていた。教育へのこのような思いがあったがゆえに、かれらは教育改造にかかわったのであった⁽⁸⁾。

普通選挙の実施か否かを争点とする総選挙が行われている最中の1920年4月、山越は、神川青年会の中心として、普通選挙を要求する檄文を村民に配布するなどの啓蒙活動を始め。その中でかれは、普選推進のための講演を土田杏村に依頼してゆく。土田は療養中であったため講演は実現しなかったが、その後、20年9月になって、土田の講演は、信濃国分寺客殿を会場に、哲学講習会として開かれることになった。土田は、このときのことを、こう書いている。

「青年Y〔山越脩蔵一引用者〕から、吾々農民が哲学の講義を聞きたいから来てくれと言ったので、私は農民と哲学と余りにその対照が面白いので、その秋出張することにしました。そして哲学の初歩手ほどきのやうなものを致しました。」⁽⁹⁾

この哲学講習会は、聴講者の好評をばくし、翌21年2月には第2回の講習会が上田高等女学校を会場に開かれた。この間、20年10月に、山越や猪坂ら上田周辺の青年たちは、「人類ノ自己実現」と「現代日本ノ正当ナル改造」を目標にかかげた信濃黎明会を結成し、普選運動と軍縮運動をすすめている。一方での政治への参加と他方での内面の充実をはかりつつ、山越は、視野をひろげて自分たちの学習機関をつくる必要を土田に提起した。土田は、京都にあって、この民衆教育機関の創設に意欲を示し、上田の山越と手紙を往復しながら、その具体化に協力していった。

土田は、山越に宛てた、21年6月26日付の葉書の中で、民衆教育機関の名称を「自由大学」とすることに賛成し、また、タカクラが講師として出講することを承諾していることを明らかにしている。土田は、こう書き送っている。

「二講座でも三講座といふのは賛成です。それぢゃあ直ぐに成立します。実際最初はその位のつもりで直ぐに自由大学の名をつけておく方がよいと思ふ。僕が一つ持って、高倉輝君（『改造』に劇をかいた人。ロシア文学の専攻）が一講座を持つ。これは学校のない連中だからよい。高倉君はもう承知して居ますから。それであと誰かを休みの時に廻して三講座はもう大丈夫出来ます。さうして居るうちに彼れ此れ承知してくれると思ふ。ぢゃあそれで愈々やりませう。規定の様なものを直ぐに考へて、愚見を数日中にお届けしませう。」⁽¹¹⁾

この手紙の数日前、土田はタカクラを近江石山に訪ねているが、これが自由大学に関する相談が主な要件であったのではないかと考えられている⁽¹²⁾。

この日、改造社の記者浜本浩が、タカクラに紹介されて土田にあってはいるが、その日の思い出を浜本は次のように回想している。文中T氏とあるのはタカクラのことである。

(p.137)

「ある夏のこと、近江石山の柳屋別荘に避暑して居た〔T〕氏に誘はれ、京都から出掛けて見ると、先客があつた。

坊主頭で、眼と口とが、顔全体の割合にひどく大きな、絵姿で見る昔の傑僧と云つた風采で、白い詰襟の夏服を着た客が、瀬田川の風景を楽しげに眺めて居た。それが、当時売出しの土田杏村氏であつた。

私達を招待したT氏は、京都大学の英文科を出て、当時健在だつた森鷗外や永井荷風に

私淑し、創作に精進してみた若い文学士だったが、どういふわけか、経済学部の手を勤めて財部教授の研究室へ通ってみたので、学内の事情にも明るく、彼一流の見地から、優秀な学者を物色しては、雑誌編輯者の私に推薦して居たが、その中に、何かと云ふと、いつでも担ぎだす二人の若い学者があつた。その一人は法理学の恒藤恭、他の一人は文化哲学の土田杏村であつた。……

T氏は日頃尊敬してみた両先輩と涼風の湖畔で清談し、旁々私を紹介する積りでみたらしかつたが、残念なことに恒藤氏は急に差支へができて来られなかつた。⁽¹³⁾

タカクラが土田の求めに応じて出講を承諾した自由大学は、21年8月に「信濃自由大学」として発足する。土田が起草した「信濃自由大学趣意書」には、設立の趣意が、「学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般の民衆が其の産業に従事しつつ、自由に大学教育を受くる機会を得んが為めに、総合長期の講座を開き、主として文化的研究を為し、何人にも公開する事を目的と致します」と、書かれた。⁽¹⁴⁾ この趣意書からも知られるように、この自由大学の運動は、日々の生産活動に従事する民衆の立場から近代日本の教育体系を批判し、新しい形態の民衆教育機関を創造しようとするものであつた。土田は、別のところで、「自由大学とは、労働する社会人が社会的創造へ協同して个性的に参画し得るために、終生的に、自学的に、学ぶことの出来る、社会的、自治的の社会教育設備だといふことが出来る」と説明しているが、自由大学は、民衆の自己教育を基礎に、労働と結びついた生涯にわたる学習の機会として構想されたのである。⁽¹⁵⁾

信濃自由大学の講義が開始されたのは、1921年11月1日のことであつた。創設期の会場となつた上田市横町の神職合議所は、40畳ばかりの大広間の畳みは荒れ果て、きた机や黒板も近所から借り集めたというように、設備は整っていなかったが、そこにつどいきたったのは「真理と自由とに向かつて熱烈な欲求をもつて居る人々」(恒藤恭)であつた。第1回の講師となつた恒藤恭は、「法律哲学」の講義を終えて京都に帰ると、「信濃自由大学聴講者諸君！」と題する一文を自由大学の運営者たちに書き送り、その中で、「現在の社会には、外形が華麗であり、宏大であつて、しかも内容が空疎であり、貧弱である計画や、事業やが、あり余るほどあつて、われわれを失望させ、憤慨させる場合が尠くない」のに対して、「信濃自由大学が、たとへてみると、むかしの塾でも思ひおこさせるやうな形態をとつて生まれ出て、謙遜に、質実に、みづからの存在と生長とをはじめたといふことは、それにたづさわる人々の誰れにとつても、かへりみて心たのしく、心づよい事柄ではないでせうか」と、講師としての感激を語っている。⁽¹⁶⁾

(p.138)

恒藤の講義あと、第2回の講師となつたのがタカクラである。タカクラは講義に先立ち、自由大学の運営者たちに次のような手紙を書き送っていた。

「土田君と同道で石ノ巻の方へ参つて居りまして只今帰りました。御手紙拝見いたしました。御引きうけは致しましたものの私の話は他の哲学や社会問題の話のやうに御参考になるまいと存じまして大変気にかかつて居る次第です。殊に仮りに『文学論』と題はつけましたものの実は只今私が創作しようと志してる心持を偽らずに申し上げて見ようと思ひますので決して学術的に組織の立つた話しでは有りませんのです。只だ此の心持をまとめるだけは骨を折つてまとめたつもりでありますどうか前以てその点を御含みを願ひ度いと存じます。只今私は非常に頭の中で苦しんで居りますのでその苦しみだけに何かの御参

考に成るかと言ふやうな気持ちがするだけで有ります。」⁽¹⁷⁾

タカクラの「文学論」の講義は、21年12月1日から6日間、神職合議所で行われた。開講に先立ち、恒藤恭から送られてきた先の「信濃自由大学聴講者諸君！」の一文が金井正によって読み上げられたが、恒藤は、その中で、講師のタカクラを次のように紹介している。

「この意味ふかい事業の第二回の試みにおいて、講義を担当される高倉輝氏を、私の敬愛する友人として、皆さんに御紹介申上げることが光栄ともよろこびとも感じます。氏は京都大学英文科を卒業されたのち、創作に従事する傍ら、文学の研究をつづけて居られます。創作の方面では、殊に劇に興味をもたれ、既に発表された『焰まつり』『孔雀城』『切支丹ころび』の三篇の脚本は、いづれも情熱と生命の力とにみちた内容を、奔放な技巧によつて表現されたものでありまして、われわれはそこに愛熱と、運命と、信仰との三つのものが、一つとなつて渦巻きくるふてゐるところの人生のすがたをあらはす三部曲のうつくしい連続に会するのであります。研究の方面では最近の著書『心の劇場』において、その一端を洩らして居らるゝとほり、ロシア文学について深い造詣を有つて居られます。

氏の講演の題目は『作家の心理』といふのだと承つてゐますが、それについては氏みづからが、切実な体験をもつて居られることでもありまして、きつと興味ふかい講演をされることゝ信じます。皆さんが熱心に御聴講あらむことを、遙かに希望いたします。」⁽¹⁸⁾

聴講者は68名であったが、タカクラの講義も、聴講者を魅了したといわれる。猪坂直一は、次のように回想する。

「僕はその年の夏、『改造』で氏の戯曲『切支丹ころび』を読んだことがある。でその作物から受けた感じで氏の風貌をスッカリ想像してゐた。ところが始めて停車場でお目にかかつた時、僕の想像と余りな違ひ様に全く面喰つてしまつたものである。僕は氏が痩せこけた腺病質らしい身体を、ハイカラな洋服に包んで、青白い沈鬱な顔で現れて来るだらうと思つてゐたのであるが、実はまるつきりそれと反対で、六尺近い堂堂たる軀、素的に血色のいい晴やかな顔、そしてザン切り頭に鳥打帽といふ出でたちなのである。……

しかし氏の講義を聴くに至つて、僕は矢ッ張り『切支丹ころび』の作者であると云ふ気がした。氏の講義は講義と言ふよりは創作である、一言一句僕等に何か深い暗示を与へね
(p.139)

ば已まない。そして随分難解な講義であるが、僕等は知らず識らずズルズル引き込まれてしまふのである。

講義中氏は盛んにヨタを飛ばす、僕なんかその雑談の方ばかりを憶えて肝腎の講義の方は殆ど忘れてしまつた。講義後も氏は毎夜定まつたやうに十人許りの会員と共に火鉢を囲んで雑談やトランプに夜を更かしたものである。この講義には上田市(19)の文学芸妓と評判の高いHと云ふ婦人が俵でやつて来たのを始め、婦人が七八人見えた。」

タカクラの好評を土田は喜び、山越脩蔵に宛てて、次のように書き送った。

「高倉の講義を熱心にきいてくれたのは有りがたい。実は多少心配して居たのだ。少し論理型でなく、直覚型の男だから。信州には向かぬぢやあないかと思つてた。併しあの男の無邪気な、正直なところを是非買ってやつて貰ひたいと思つて居たのだ。大好評で何よりうれしい。高倉も悦んで、手紙をよこした。」⁽²⁰⁾

タカクラも、郷里の七郷村に帰ると、山越に宛てて、次のような手紙を書いている。

「一昨日帰り着きました。京都で土田に逢いまして大いに話しに花が咲きました。御病
気も好く成りましたか。私も東京であれからとふとふ三日ほど熱を出して寝て了ひました。
信州から帰ると又特別に温かです。が寒い信州を大いに土田と二人で恋しがった事とし
た。」⁽²¹⁾

タカクラの「明るい磊落^{らいらく}な人柄と博学」は聴講者の好評をばくし、やがてタカクラは「自
由大学随一の人気講師」⁽²²⁾となる。そして、タカクラは、自由大学への出講をきっかけに信
州の農村青年たちと結びつくようになるのである。

註

(1) 上木敏郎『土田杏村と自由大学運動』誠文堂新光社、1982年。土田杏村の生涯につ
いては、同書を参照のこと。

(2) 上木敏郎『土田杏村と自由大学運動』前掲、67頁。

当時のタカクラと土田との交友の一端をうかがわせるものに、次のような土田の一文
がある。16年10月7日のことである。

「……教室の入口に立つてみると、室の中から来る空気がプンと阿片の甘つたるい香
りを帯びてむさかへるやうな、ぼーうとした心になる。露西亜文学を教へに来る神戸の
先生、阿片のはいつた煙草を教室でまで吹かすので、流麗な露西亜語にふさはしい空
気が教室に満ちてゐる。友人の一人が側へ来て、『何を考へてゐる』といふから『ツ
ー・マイ・サッフオオ』といふと、『ジャパニイズ・サッフオオ?』といふから『ノウ
・ヒーア・イット・イズ』本当に私のふところには私の好きな濃紫の絹表紙の『サッフ
オオ』がはいつてゐる。友人が読めといふから初めの方の好きな会話のところを一寸
仏蘭西の女らしくゆるやかに読み出すと、『全くいいね』といつて二人で好きな場
所場所の話をする。そんなことをしてゐるうちにベルがなつた。……」(土田杏村『妻
に与えた土田杏村の手紙』第一書房、1941年、1916年10月9日付)。

文中の「友人の一人」とあるのがタカクラのことである。

(p.140)

(3) 土田杏村「心の劇場 高倉輝氏著」(『文化』第2巻第6号、1921年9月号)。

土田は、この中で、「自分も或る期間、高倉君と二人だけ机を並べて山口先生の授業
を受けたのであるが、自分には何の仕事も出来ない間に、君はかうした立派な訳文集
を作つて故先生に捧げたのは甚だ悦ばしくもあり、又何だか自分だけ済まない様な
感じもする」と述べたうえで、「エウレエノフの劇は二つとも大変面白いものである。
訳文も達者なものだ」、「訳詩には大分沢山バリモントが這入つて居る。非常に巧
みな訳し振りである」と、紹介している(同前、63頁)。

(4) 長野県上田・小県地域のデモクラシー運動については、拙稿「教育県・長野一上
田自由大学とその周辺一」(金原左門編『地方デモクラシーと戦争』文一総合出版、
1978年)で素描したことがある。信濃自由大学(のち上田自由大学)については多
くの研究があるが、さしあたり拙稿「大正デモクラシーと民衆の自己教育運動一
上田自由大学を中心として一」(『季刊現代史』第8号、1976年)を参照のこと。

(5) 小崎軍司「農民哲学者・金井正」(『思想の科学』別冊第9号、1974年)。

(6) 金井正「二つの催青」(『芸術自由教育』第1巻第6号、1921年6月)53頁。

- (7) 山越脩蔵「青年と青年教育者との対話」『芸術自由教育』第1巻第3号、1921年3月)。
- (8) 拙稿「民間教育運動－山本鼎の自由画教育運動を中心として－」(鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統合と抵抗』三、日本評論社、1982年)を参照のこと。
- (9) 土田杏村「自由大学の意義」(『文化運動』1922年10月号)。
- (10) 信濃黎明会については、拙稿「大正デモクラシー期における青年党類似団体の動向－信濃黎明会の活動を中心に－」(『自由大学研究』第9号、1986年)を参照のこと。
- (11) 山越脩蔵宛土田杏村書簡(1921年6月26日付)。
- (12) 上木敏郎「若き日の土田杏村(二)」(『成蹊論叢』第7号、1968年9月)65頁。
- (13) 浜本浩「思ひ出」(土田杏村全集月報『紫野より』第12号、1936年)5頁。
- (14) 「信濃自由大学趣意書」の全文は、自由大学研究会編『自由大学運動と現代』(信州白樺社、1983年)243～244頁を参照のこと。
- (15) 横田憲治編『自由大学とは何か』(信濃時事出版部、1924年)4頁。
- (16) 恒藤恭「信濃自由大学聴講者諸君！」(信濃自由大学『信濃自由大学の趣旨及内容』1923年)10頁。
- (17) 信濃自由大学発起者宛高倉輝書簡(1921年9月13日付)。
- (18) 恒藤恭「信濃自由大学聴講者諸君！」前掲、12～13頁。
- (19) 猪坂直一「上田自由大学の回顧(五)」(『自由大学雑誌』第1巻第5号、1925年5月)16頁。
- (20) 山越脩蔵宛土田杏村書簡(1921年12月12日付)。
- (21) 山越脩造宛高倉輝書簡([1922年12月]29日付)。
- (22) 猪坂直一『回想・枯れた二枝－信濃黎明会と上田自由大学－』(上田市民文化懇話会、1967年)48頁。

(p.141)

8 長野県への移住

1922(大正11)年1月15日、タカクラの最初の戯曲集『三部曲 女人焚殺』(アルス)が出版された。これは、アルスから高倉輝著作集第一輯として刊行されたが、これには、土田杏村と恒藤恭の紹介文が添えられている。

土田は、こう書いている。

「高倉君。君は此等の諸作を皆な一個のエチュウドだといった。そして君がすべてのものを投げ出して、今日はやつと二枚と、たゞ其の一つの作許りに何箇月かの全生命を注ぎ込んで居た真剣さを、僕ほどよく知って居たものは無いかと思ふ。最後の『切支丹ころび』などになると、筆惜みに筆惜みをして、全篇に向ひ甚だ大胆な省筆をしたために、其れを読んで居ると、君が痛々しいまでに緊張した構想や描写が眼について、僕は其れを一挙に読み去るのに堪へなかつた」と。

そして、「其の全作を見て貰ひ、其の中に一のヒユマニテイーがどういふ風に強く表現させられて居るかを知って貰ふことだ」と述べ、「僕は君の創作の態度をよく知って居るだけに、今、君の作品集の公にせられる場合、其れだけの事を世間に向つて語る可き義務を持つて居る様に思ふ」と、このタカクラの戯曲集を紹介した⁽¹⁾。

また、恒藤恭は、タカクラをトルストイの物語に出てくる「イワンの馬鹿」のような人だというわけではないが、「共通な性質を何処かに有つてゐる人だといふやうな気もちがする」とし、「そうした人の至つて乏しそうな日本の文壇の中に、そうした人のゐることを知るのは、ほんとうににうれしい」と、作者のタカクラを紹介している⁽²⁾。

タカクラは、山本宣治に宛てた手紙の中で、「切支丹ころび」が「幾分か今の心持に近いところが有ります⁽³⁾」と、書いているが、タカクラにとって、この戯曲集はヒューマニズムをモチーフに人生の意味を深くとらえようとする作品であつた。戯曲集をまとめたタカクラは、「著者より読者へ」の中で、「とにも角にもこれが作者が漸く真剣に創作の生活に入らうとした最初の足跡でございます。これを第一歩にしてこれから出来るだけの為事を続けて行き度いと思つて居ります」、「これから出来るだけ苦しんで見ようと今は只だそればかり思つて居ります⁽⁴⁾」と、これからの決意を書いている。

戯曲「孔雀城」は、22年3月、踏路社によって東京有楽座で公演され、青山杉作が將軍ユダとして出演した。この公演は、その後、京都・大阪でも行われた⁽⁵⁾。

その後、タカクラは、郷里の土佐で執筆をしていたが、その一方で信州に移住し、そこで執筆に専念しようという気持ちをいだくようになっていた。この年、タカクラが山越脩蔵に宛てて書き送った数通の手紙には、筆が思うように進まない状況と体調の不良を告白するとともに、信州に移住したいとの気持ちを明らかにしている。

2月11日付の手紙には、こう書かれている。

「先日は電報を今日はお手紙を有難う存じました。小生も信州へ参り度くて溜まりませ
(p.142)

ん。自由大学の会員諸君にもお目にかかり度くて溜まらぬ気がします。実は恒藤君の真似をして幾度も手紙を書きかけたので有りますが、何うも白白しい気がしましてやめて了ひました。どうか宜しくお礼を申し上げて下さい。三月には有楽座で小生の孔雀城をやりませうと、それに参りますから、多分その時信州へ参りますから、どうかその時は是非一つ僕の為に講演会を開いて下さい。実は講演は申しわけで会員諸君と逢つて一緒に話しがし度いと思ふので有ります。

私も今年はいよいよイワンの馬鹿の生活を徹底させようと思つて居ります。是非農民美術の御厄介に成り度いと存じます。

どうかその他の諸君へ宜しくお伝へ下さい。」⁽⁶⁾

タカクラは、自由大学への出講から帰つたあと、恒藤恭の「信濃自由大学聴講者諸君！」にならつて手紙を書きかけたがやめたこと、3月に上田へ行く予定にしていることを伝えている。しかし、それから2週間後、作品の執筆がまったく進まず、上田へ行くことが出来なくなったことを伝えている。

「御端書有り難う存じました。土田の病気の事少しも知らなかつたのですから愕きました。

小生は上京を中止しました。今の作品を全然失敗したからです。これから全く初めからやり更へる所です。

健康は全然こわしてるし、全くの死に者^{ママ}狂ひです。これが出来上るまでは一寸も動けません。従つて御地行きも出来ません。非常に残念です。どうか皆さんに宜しく御伝へ下さい。」⁽⁷⁾

なお、手紙の中にある「土田の病気の事」とは、信濃自由大学の第4回講座として2月14日から土田杏村が「哲学概論」を講義したが、4日目の講義を終えたあと、急に発熱し、咽喉をおかさされ、声が出なくなったため、講義を中止せざるをえなくなったことをさしている。⁽⁸⁾

それから1カ月後、タカクラは信州で執筆することを決意し、星野温泉に家を借りることが出来るか、山越に依頼している。こう書き送っている。

「私もあれから随分苦しみました。頭も健康もめっちゃめっちゃにして一時は[ど]うなる事かと存じましたが、漸く力を回復して参りました。多分今度こそは出来上るで有りませう。もし今の作品が出来上がりましたら、事によると暫く信州へ行かうかと考へて居ります。[こ]ちらではやはり親戚なんぞが面倒[で]すから、暫くそちらで次の作にかからうかとも考へて居ります。甚だ恐入りますが、もしお序も有りましたら例の星野温泉の別荘だかの家一軒都合がつかますまいかお聞き合はせ下さいませうまいか。⁽⁹⁾

4月には山越の尽力で家を借りることが出来たが、その後、タカクラは執筆に苦しみ、体調も崩し、一旦、信州行きを断念する。山越に宛てて、こう書き送っている。

「折角御^{ママ}尽力を願ひましたのに、私は只今病気で倒れて居ります。昨年からかかって居りましたら作品を先日全部放擲して⁽¹⁰⁾了ひました。丁度七百枚ほど原稿を書き棄てましたの
(p.143)

で、私としては可なりの打撃でした。それがやはりからだを悪くしたものと見えまして、どっと床について了ひましたのです。殆どからだ全体を悪くしまして胸、髄、脳、神経、心臓、視力、胃、腸とこれだけ悪いのですからやり切れません。全快次第出発そちらで為事をし度いと思ひますが、右のわけで今ちょっといつ立てるか分かりませんのです。どうか悪しからず、向うへお^{ママ}尽へ⁽¹¹⁾下さいました家は借手が有りましたらどうかお借し下さる様御留計ひ願ひ度く存じます。」

こうして苦しみ抜いて執筆した長編小説「蒼空」の原稿は、秋にはほぼ完成の目途がたつようになった。そして、安田ツウとの結婚をひかえたタカクラは、今度こそ信州への移住を決意する。タカクラは9月に山越に書き送ったと思われる手紙で、次のように書いた。

「先日は御手紙有難存じました。毎度で何とも恐入りますがまた御願が出来ました。

私は此月末に駆落的結婚をやります。同時に、今までやってもやっても失敗した昨年来の作品を最後の努力でやっつけて了ふ積りです。で十月の初めから十一月末頃まで此前御手数をかけた例の星野温泉で（此処が都合が悪ければどこか他の信州地でやろうと思ひます）送り度いと思ひます。で別書の通り星野温泉へ手紙を書きましたが宛名を存じません。御面倒ですが、書入て投函して頂けないかと思ふのであります。甚だ御多用中申上兼ますが御願申上ます。

右のわけで唯今大変貧乏で有りますが、漸く旅費と二人が二月ほど暮らすだけ工面を致しました。御厄介が向うへかかる気遣は無積りです。何しろ将来は学海という信州へ移住し度いと思つて居ります。

至急右御願のみ申上ました。⁽¹²⁾

こうしてタカクラは、10月15日、長野県の星野温泉に移ってくる。⁽¹³⁾そして、信濃自由大学の第2期講座の開講を前に再び出講の依頼があると、原稿の清書の目途もたったことから、12月に出講することを承諾する。タカクラは、次のように山越に書き送っている。

「小生昨年来失敗に失敗を重ねて居ました作品漸くとに角月内ぐらゐで全部の浄書を了る事になりました。でとに角来月上旬自由大学の方へ出る約束をさして頂く事が出来ると思ひます。完成の上又これまで通り葬る様な心持になれば格別ですがさうで無ければ作品を持って上京、二三日中に帰る積りですから、一日二日の違ひは有りまして、多分十二月五日頃から四五日間やらして頂く積りで居ります。題目は此の前の文学論の続きで、それから列伝へ入る積りです。

唯今此の地方へ移住し度い希望に燃えて居ります。もし今度の作品を世の中へ出す心持になれる様でしたら、全力を挙げて此の附近へ家を造る計画をする積りです。」⁽¹⁴⁾

信濃自由大学の第2期講座は、21年10月から始まった。第1回は10月14日からの土田杏村の「哲学概論」で、第2回が11月1日からの恒藤恭の「法律哲学」で、そのあとをタカクラが第3回の講座「文学論」を受け持った。12月5日から9日までの5日間で、場所は長野県蚕業取締所上田支所が変わった。聴講者は前回より5名少ない63名であった。

タカクラの講義を聴講したひとりに青木猪一郎がいる。殿城郵便局に勤めていた青木は、
(p.144)

小学校時代の恩師六川静治にすすめられて受講したが、そのときのことを日記にこう記している。⁽¹⁵⁾

「午后三時吹雪の中を上田の自由大学へ、……寒い事、寒い事、鼻水許り出て困る。六川先生が受付にゐられて大満員だった。浦里の渡辺局長、堀込校長、細田延一郎氏等来聴中だった。一寸面映い気がされた。五尺八寸の高倉氏、一寸武井さんに似た人だった。ロシア文学のゴーゴリ氏から始めるとの事最初ロシア語でアルハベットを覚えて貰ひたいとの事、英語のアルハベットさえ知らぬ俺は直ぐ後ろに六川先生がゐられるので筆記するのさへ何だか浅越で弱っちまった。帰途寒いのに風を引いちまったのに苦しい思ひをして帰って来た。」(12月5日条)

「自由大学、ゴーゴリの作品やらロシア革命の話でとても面白かった。始めての日のあの向きでは何んな事になるかと打案じられたのに、八時半帰宅。」(12月7日条)

タカクラの講義が「面白かった」との感想は、青木だけでなく、中沢鎌太の日記にも記されている。中沢は、こう記している。⁽¹⁶⁾

「自由大学へ参る、停電の為に一寸都合が悪かった。頭痛も話が面白かったものだから忘れ勝ちであった。」(12月5日条)

最終日の12月9日の講義後には茶話会が開かれ、タカクラも残って参加した。青木は、茶話会について、「十銭会費の茶話会、大きなパンを配布されたのに、つましい女性と相対したのには恥づかしくて大閉口だった」(12月9日条)と記し、中沢は、「茶を飲し九時頃まで私等は先生を取り巻いて語った」(12月9日条)と記している。

なお、タカクラは、12月3日の午後、自由大学主催の「文学講演」を上田中学校で行っている。⁽¹⁷⁾

自由大学を終えたあと、タカクラは、一旦、杳掛に戻った。その後、京都に行き、12月25日、京都四条の万養軒で安田ツウとの結婚式をあげた。集まったのは、山宣一家をはじめ、親族だけであった。タカクラは、ロシア帽にルパシカ、ビロードのズボンに黒革の長靴という服装で、津宇は、裾模様の紋付きの着物であった。親族が集まって、会食し

ただの簡単な結婚式であつた。⁽¹⁸⁾

結婚式をすますと二人は、長野県の杓掛に新居を構えた。

註

- (1) 土田杏村「『女人焚殺』」(『女人焚殺』付録、1922年) 1～2頁、書評集『高倉輝著作集』(アルス) 2～3頁。
- (2) 恒藤恭「イワンの馬鹿」(『女人焚殺』付録、1922年) 3頁、書評集『高倉輝著作集』(アルス) 1頁。
- (3) 山本宣治宛高倉輝書簡(1922年1月30日付)。
- (4) 高倉輝「著者より読者へ」(『女人焚殺』付録、1922年) 3～4頁、8頁。
- (5) 寺田太郎編「年譜」(青山杉作追悼記念刊行会編『青山杉作』1957年、同刊行会) 96頁。
- (6) 山越脩造宛高倉輝書簡(1922年2月11日付)。
- (7) 山越脩造宛高倉輝書簡(1922年2月26日付)。

(p.145)

- (8) 猪坂直一「上田自由大学の回顧(六)」(『自由大学雑誌』第1巻第7号、1925年7月) 19頁。
- (9) 山越脩造宛高倉輝書簡(1922年[3]月26日付)。
- (10) タカクラは、1922年4月19日付の手紙で、「御手紙有り難う存じました。種々御配慮を煩し有り難う存じました。厚く御礼申し上げます。漸くす為事も目鼻がついて来ましたので思はず一息つきました。併し本当はこれからまた実に苦しいのです。併し何れ近日、拝眉の機を得る事が出来るで有らうと楽しみにいたして居ります。取り急ぎ御礼のみ」と、山越に書き送っている。
- (11) 山越脩造宛高倉輝書簡(1922年[]月26日付)。
- (12) 山越脩造宛高倉輝書簡(1922年[]月5日付、『信州白樺』第30号、1978年12月、所引)。
- (13) タカクラが星野温泉から山越に宛てた葉書に、「やっと今日参りました。都合で一人参りました」とある(山越脩造宛高倉輝書簡[1922年10月15日付])。
- (14) 山越脩造宛高倉輝書簡(1922年[]月18日付)。
- (15) 青木猪一郎日記、『自由大学研究』第4号(1975年) 39～40頁参照。
- (16) 中沢鎌太日記、『自由大学研究』第4号(1975年) 42～43頁参照。
- (17) 『長野新聞』1922年11月28日付。
- (18) タカクラ・ツウ「自伝草稿」1955年、75～76頁。松木貞夫『本屋一代記』(筑摩書房、1986年)にも、「高倉は大正十一年十二月結婚式を挙げた。ロシアの服装であるルパシカを着て集まったひとたちを驚かせた。花嫁は宣治の親戚筋に当る津宇という名の娘だった」(同書、307頁)とある。なお、タカクラは、結婚式のときの山本宣治を回想して、次のように書いている。「私の妻は山宣のいとこだが、もの心のついた頃から、彼の家でいつしよに育つたから、きょうだいも同じだつた。私たちの結婚式、と云つても、ごくちかしい親戚十人ばかりが、京都のある料理屋で、いつしよに飯を食つただけだが、とにかく、その結婚式の席で、彼はろこつな性教育の話をやりました。これには、

かえつて私たちのほうがてれた。」(高倉テル「山本宣治の死」『政界ジープ』第1巻第3号、1946年10月、13頁)。

9 「文壇」からのボイコット

山越脩蔵が準備したタカクラの新居は、星野温泉のある旅館の別荘であった。信越線の杓掛駅から星野温泉へ向かったとき、あたりは一面の雪景色で、雪に埋もれた浅間山がそびえ立ち、雑木林の所々に白樺の木が銀色に光り輝いていた。ツウは、痛いような寒さに、これからの生活の厳しさが思いやられて、思わず身の引き締まるのをおぼえたという⁽¹⁾。

タカクラは、山口茂一の形見のサモワールでお湯をわかして、紅茶を飲みながら、静かに、創作と読書にふけていた。しかし、すぐに二人に、最初の生活難がやってきた。結婚前に、タカクラは、土田杏村の世話で、長編小説「蒼空」を大阪のプラトン社の雑誌に連載することになり、原稿を渡して原稿料を半分だけ受け取り、それを結婚の費用にあて

(p.146)

ていた。ところが、2カ月して、プラトン社は、急に、「都合で掲載できない」といって破約し、原稿を全部返してきた。このため、生活費にも事欠くようになったタカクラは、妻のツウに相談し、ツウが持ってきた、着物がぎっしり詰まっている柳行李の一つを、タカクラが学生時代に通った京都の質屋へ送って、金を借りることにした。そして、折り返し送られてきた為替で、やっと一時を凌ぐことが出来たのである⁽²⁾。

プラトン社がタカクラの原稿掲載を破約してきただけでなく、いくつかの雑誌社や出版社に頼まれていた原稿や出版も、すべて向こうから断ってくるようになった。

タカクラが朝日新聞の記者から聞いた話によると、菊池寛を中心とする当時の文壇の連中が、「高倉の作品をのせるようなら、おれたちは書かない」と言っ、雑誌社をおどかしてきた、という。また、大阪毎日新聞の薄田泣菫が、これは、久米正雄・菊池寛・芥川龍之介などの『新思潮』の一派が、文壇を独占するために、新しい作家が出てくるのを妨げたのだ、と書いているといわれる⁽³⁾。とくにタカクラを文壇からボイコットさせるために菊池を動かしたのは芥川であった⁽⁴⁾。

1923(大正12)年1月、タカクラは、土田杏村に宛てた手紙の中で、「作早速かかる。出来てからどこへでも出す所考へる。新小説が突然変な態度をして意が良かったがやっと今分かった。あすこから菊池一派の雑誌が出た。滑稽奮闘奮闘」と書いているように、原稿掲載の妨害が菊池寛らの一派によることに気づいていた。手紙の中にある「新小説が…あすこから菊池一派の雑誌が出た」とあるのは、『新小説』を発行する春陽堂から、菊池寛の編集による『文芸春秋』が発刊されたことをさしている⁽⁵⁾。

これ以後、タカクラの作品は、単行本として、出版社のアルスから出るようになった。アルスは、タカクラの友人、北原白秋の弟北原鉄雄が社長をしており、戯曲集『女人焚殺』を出版して以来のつき合いがあったことによる。

1月下旬、タカクラは、福島県原ノ町で田口富五郎が中心となって始めた東北文化学院で「文学論」の講義をしている。原ノ町から帰ったタカクラは、土田杏村に宛てて、「今朝6時前帰って来た。随分疲れた。原町へ行くにはよほど汽車を考へて行かぬと労びれる。

……講義はとに角六十余の聴衆が最後まで残ったから成功だ。だが教師ばかり多くて何だか教育会の講習のやうな気持がしたが（聴衆の方にも其の気で来たものも多かった）、主催者田口は実に快男子だ。どうか旨く成功さし度い。」と、書き送っている。⁽⁶⁾

4月に入って、タカクラは、星野温泉の上にある千が滝の貸別荘へ移った。⁽⁷⁾そこは、夏の避暑客のための簡素な貸別荘が唐松の林の中に点在するところであった。タカクラは、まだ雪の消えない唐松の林を毎日のように散歩しては、創作に専心した。そのころのことを、こう書いている。

「その頃、私は、生涯の迷い道に立っていた。どう生きたらよいかとゆう問題のために、非常に苦しんでいた。あすこの高原は、一めんにかラマツの林が続いている。仕事のあいだには、そのカラマツ林のあいだの細い道を歩いて、思いにふける。

「一すじの道、ほのかなり、冬木立」

(p.147)

その頃、そうゆう俳句を作ったが、それは、すぐに私自身の心持だった。⁽⁸⁾

かすかながらも作家として生きていく一本の道が見えはじめていた。

4月、戯曲集『海峡の秋』（アルス）が出版された。「砂丘」と「海峡の秋」の二つの戯曲が収録されている。この作品をめぐって、堺利彦とタカクラとの間で、小さな「有閑論争」⁽⁹⁾が行われた。

堺利彦から、タカクラに宛てて、次のような『海峡の秋』の読後感が送られてきた。

「『海峡の秋』拝読しました。ツイ少しばかり覗くつもりで読みかけたら、とうとう読んでしまひました。どこかに強い力のある事を感じました。有閑階級の娯乐的両性研究として、そして又、実社会を離れた夢幻的人世哲学として、僕にも矢張り愉快が感じられません。渦巻の所が一番よかったです。」

堺の「有閑階級の娯乐的両性研究」という批評に対して、タカクラは、「有閑階級と言ふのは生活に余裕が有ると言ふ意味でせうか。さうすると、貴方がたは一つの作品をお読みになるとその作者の生活から財産まで洞察なさるのでせうか。それとも、作品が生実活に触れてゐないと言ふ意味でしたら、落語の前座や馬の足などもやはり有閑階級に属するのですか。この点今一度お伺申上ます。実は私は社会運動などに携つていらつしやる方は固よりとして労働者だつても私共よりはずつと有閑階級だとこれまで一人で極めてゐたものですから、大変意外に感じた次第です」と、葉書に書いて、堺に送った。

これに対して堺は、「作者の財産を洞察」する事は出来ないが、あんな事を面白がつて考へたり、書いたり、読んだりする人達は「有閑階級」だと思ひます。尤も、僕自身も幾分かその教養を受けてゐるので、矢張りあんな物に多少の興味を感じます。「落語の前座や馬の足」は渡世の為だが、あなたの脚本は商売にはなりますまい」と、回答し、「僕も労働者に比べれば多少の有閑者ですが、唯だその閑を社会運動に捧げてゐるといふだけの事です。さうしなければ気が済まないといふだけの事です」と、つけ加えた。

タカクラは、堺に宛てて、次のような返事を出した。

「商売になる」かならぬかは別の問題だと存じますが、とにかく今のところあんな物を書きます為には私にはほかに全く閑が無い、全く生活に余裕が無い、つまりあれが私の生活の全部で、無論経済的にもその全部だと言ふことを申上げて、一まづこの有閑論争を打ち切ることに致しませう。」

こうして論争は終わったが、タカクラは、経済的にもぎりぎりの生活を余儀なくされている中で、全力をつくして書き上げた作品だけに、「有閑階級」の作品と批評されたことに反論しないわけにはいかなかったといえる。

次いで6月には、恩師山口茂一との交流をペーソスあふれるタッチで描いた長編小説『蒼空』(アルス)が出版された。

伊藤野枝は、『蒼空』を「此の頃、小説を読んで見て面白かつた事は滅多にない」中で、「一つだけ気持のいゝ小説にブツかつた」と、高く評価し、次のように批評している。

「普通の作家ならば、陰気な雰囲気や冷たい人間の意地悪な交渉をわざわざでもつくり
(p.148)

出さずにはおくまいやうな題材が、此の作ではまるで反対に、明るいユーモラスなものになつている。しかも、そのユーモアにも、何の皮肉も、光つた笑ひも含んではゐない。悉くを真実として認めさず強い力をかくしている。

……私はこんな形式と内容でこれ程人に親しみを與へる不思議な魅力を持つた小説は初めてブツかつた。これ程平坦な呆つ気ない書き方で、これ程完全に描いた丈けの人物を悉く生かし、しかもその描いた人物に近づけ親しめるといふむづかしい効果をあげる事が出来るものだと言ふ事を初めて知つた。⁽¹⁰⁾

この『蒼空』が出版された直後の6月9日、軽井沢の別荘で有島武郎が雑誌記者の波多野秋子と心中した。有島とは、タカクラよりも妻のツウの方が親しく、有島の死を知ったとき、ツウは驚き、脳貧血で倒れた。タカクラは、そのときのことを、こう回想している。

「つい隣の軽井沢の別荘で有島武郎が自殺した。僕がその別荘を訪ねたのは死骸を片づけた翌日であつたが、石炭酸で浴せるやうに消毒してあるにも拘らず、尚堪へがたい異臭が家の遙かに外まで漂つてゐた。縊死した部屋にはひつて、留守番に当時の模様を聞いてから外へ出た。

だが、帰途についてからも、その不快な異臭がどうしても僕の体から抜けなかつた。そして、それが一層重く僕の気持を押しつけた。

すると、その時、すぐ向うの森のなかで悠然と啼く郭公の聲がした。思はず僕は腸の底まで洗ひ清められたやうな気持がした。生きてゐるといふ事の愉快さをその時つく／＼味はつたやうに思つたものである。⁽¹¹⁾

そして、タカクラは、「有島武郎はバカだ!」、そう口に出して、言った。⁽¹²⁾

有島の死に、観念的な知識人の限界をみたに違いない。とはいえ、タカクラ自身、孤独な自己追求によって、生活的な理想主義の途をさぐる格闘のさなかにあつた。

6月30日、タカクラは、ツウとの婚姻を届け出た。それは、長野県を本拠地に作家として生きていくことの決意を示すものでもあつた。

註

(1) タカクラ・ツウ「自伝草稿」1955年、171～172頁。

(2) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、172～174頁。

(3) 高倉太郎「父と子の最後の対話」(『衣笠』第6号、1987年)207頁。

なお、上泉秀信の執筆と思われる「高倉輝氏訪問記」(『都新聞』1929年6月12日～6

月 15 日付) には、次のようにある。

「歴史物としてはきわめて本格的な作品であると激賞された「孔雀城」によつて、氏には一躍文壇の寵児たる幸運が約束されたやうに見えた。が、事実はこの出世作を名残として、以来、今日まで氏の名は雑誌から絶たれたのであつた。

そこには何らかの事情が無ければならぬ。消息通は、当時流行児であつた某々作家が高倉氏に対する反感から、その雑誌発表を妨害したと伝えているが、不愉快なこの

(p.149)

詮議立ては先ず預かつて、ただ一つ「孔雀城」発表以後、二つの雑誌から執筆を依頼された事実だけを伝えるにとどめる。然もその一つは作品が雑誌社に渡されて印刷にまで付されたのであつた。それが発行間際になつて契約破棄、つまり掲載を拒絶したのである。氏の友人土田杏村氏はこの不徳義に憤激して、爾来久しく両雑誌の執筆を拒否して高倉氏の擁護に当つた。」

(4) 高倉太郎は、父テルとの対話の中で、次のような話を交わしたことがあると回想している。

「あるとき、ベッドに横になっていた父が急にムクムクと起きあがってきて、機嫌よく私に話しかけた。

父 「私は、三高を卒業したとき、東大を受けようか、京大にしようか、まよつたことがあるんだよ。」

これは私には初耳だった。

私 「ほう？」

父 「しかし、東大は官僚の養成が目的で、そのなかから能吏が出ているが、京大は哲学を重視して、朝永三十郎、西田幾多郎らがいて、その学風が私の気に入っていたから、京大に決めたんだ。もし私が東大へ行っていたら、芥川（龍之介）たちといっしょになっていたわけだが、そうしたら、私は、いったい、どうなっていたらうね？ その芥川が私を文壇から追放したんだ。」

私は自分の顔色が変わるのを感じた。まさか、父がボケてきたのではないだろうな？ と。

私 「では、菊池寛ではなかったんですか？」

父 「菊池寛もそうではあったが、菊池を動かして私をボイコットさせたのが芥川だったのだ。」

私は目がくらむ思いだった。父はどこからその事実を知ったのか？ 何で、いま、そんな話をしはじめたのか？

父はニコリとして私を見つめた。私は仰天して、そのあとの話がどうなったか、今では覚えていない。ただ、父は淡々として、こういう意外な事実を述べたにすぎなかった。」(高倉太郎「父と子の最後の対話」前掲、204～205頁)。

(5) 土田杏村宛高倉輝書簡(1923年1月23日付)。

(6) 土田杏村宛高倉輝書簡(1923年1月23日付)。

(7) タカクラ・ツウ「自伝草稿」前掲、175頁。

(8) 高倉テル「カッコー」(『ミソ・クソ・その他』厚生閣、1939年)、54～55頁。

(9) 堺枯川(利彦)と高倉輝との葉書のやりとりによる「有閑論争」は、『高倉輝著作

集』(アルス、1926年)7～9頁に収録されている。

(10)伊藤野枝「『蒼空』」(『高倉輝著作集』前掲)4～6頁。

(11)ツウは、山本千代に宛てた手紙で、「新聞にて御承知の有島様の御死去は只だ只だ驚き入るばかりにて、さぞかし宇治にても伯父様初め皆様の話題に毎日出る事と話し居り候。大きな立派な二階づくりの洋館にて先達家の中まで見に参られ候。近所の人達は大変な迷惑にてこぼし居られ候よし、只だ只ださわがしい世の中にて新聞記者の喜びにこそなるのみ多とする今日此の頃だと思はれ候。一昨夜も私の家へおまはり様が尋ねに来られたるやうな次第にて只だ可哀さうなのは小さい子達計りにて写真見ては涙催し居り候。今は子供の三輪車が三つその別荘に残り居り候」と書いている(山本千代子宛高倉通書簡、1923年7月13日付)。

(12)高倉輝「郭公(二)」(『都新聞』1935年5月19日付)。

(p.150)

(13)高倉テル「カッコー」前掲、60頁。なお、本文のもとになった「郭公」(『都新聞』)には「有島武郎はバカだ！」の文言は入っていない。

おわりに

本稿は、タカクラの全生涯のうち、幼年・少年時代から学生時代を経て長野県に移住し作家として出発するまでの、約三分の一にあたる期間を跡づけたものである。

タカクラは、人は誰でも青春時代に、一生の方針、職業、結婚その他いっさいの問題の大体の方向を決めるが、「わたしの青春時代は、ひどく長く、ひどく苦しいものだった」、それは、「十代から二十代へかけて、さらに、三十代へかけてと、生き方の根本方針をなんども変えなければならなかったから」だ、と書いている⁽¹⁾。

タカクラにとって人生の大きな転機となった第1回目は、タカクラが、貧しい家庭に育ち、学問をして出世をし、家を再興することが自分の義務だと信じていたが、中学時代に、藤村操の厭世自殺に大きなショックを受け、人生の意義、人生の目的とは何かをたえず考えるようになり、大学で哲学を勉強しようとして決意し、医者になるために岡山医専を受験すると見せかけて、三高を受験し合格するまでの時期である。第2回目は、京大英文科でロシア語とロシア文学を研究し、京大卒業後、新村出の指導で嘱託として大学に残ったものの、ロシア革命や米騒動が起きる中で社会問題に対する新しい関心が生まれ、人生問題の悩みが解決しないまま大学での学問研究に興味を失い、文学作品の創作に打ちこむようになり、大学をやめて作家として生きていくまでの時期である。そして、土田杏村の誘いで自由大学に出講したことが機縁で長野県に移住し、作家として出発した直後に、文壇からボイコットされることになる。本稿で扱ったのは、この時期までである。

第3回目は、長野県に移住し、創作活動と自由大学の指導にあたるかたわら、自由大学の青年たちや周辺の農民たちと交わり生活する中で、また、文壇からのボイコットにより、当時のインテリゲンチヤアの生活から離れる中で、農民運動に関わるようになり、自己変革をとげていく時期であるが、この時期については別稿で検討したことがある⁽²⁾。

タカクラの全生涯を跡づける作業は引き続き今後の課題としたい。

註

- (1) タカクラ・テル「人生問題から社会問題のナヤミへ」(『前衛』第304号、1970年2月)、162頁。
- (2) 拙稿「タカクラ・テルの一九二〇年代－タカクラにおける「民衆」の発見－」(長野県近代史研究会編『上条宏之先生古稀記念論集』2008年)。

(p.151)

注；行末にある(p.112)～(p.151)は、『研究紀要』の掲載頁を表している。